

# 砂浜美術館の展望

## —浜と人の関わりから—

田中 瞳<sup>1</sup>・濱口 恵子<sup>1</sup>・安岡 浩二<sup>1</sup>・飯國 芳明<sup>2</sup>・小澤 萬記<sup>3</sup>・村瀬 儀祐<sup>4</sup>  
(<sup>1</sup>高知大学大学院人文社会科学研究科,<sup>2</sup>人文学部社会経済学科,  
<sup>3</sup>人文学部国際社会コミュニケーション学科,<sup>4</sup>生涯学習センター)

### A Historical Review and Perspective on the Seaside Gallery in Ohgata

Hitomi TANAKA<sup>1</sup>, Keiko HAMAGUCHI<sup>1</sup>, Kouji YASUOKA<sup>1</sup>, Yoshiaki IIGUNI<sup>2</sup>,  
Kazunori OZAWA<sup>3</sup> and Gisuke MURASE<sup>4</sup>

<sup>1</sup>*The Graduate School of Humanities and Social Sciences*

<sup>2</sup>*Department of Economics, Faculty of Humanities and Economics*

<sup>3</sup>*Department of International Studies, Faculty of Humanities and Economics*

<sup>4</sup>*Education and Research Center for Lifelong Learning*

**Abstract :** A seaside gallery was established in Ohgata chou in 1989. There is, however, no building for it. The gallery emerged for only a few days a year with a thousand T-shirts hanging over the seaside. For building up the gallery the promoters invite photos and illustrations from all over the country and print them on T-shirts and hang them up. The landscape lets visitors feel value of nature around them in a new sense. The aim of this program lies just in it. The promoters stress the conversion of the viewpoint and the importance of the nature as it is. Moreover they deny too much dependence on the construction industry in order to develop the region.

Until now the activities have been appreciated by people but local residents. Therefore the promoters have struggled to make the seaside gallery comprehensible to local residents. But the efforts have not been successful yet.

In this paper we first summarize the historical development of activities on the seaside including not only the seaside gallery itself but also related activities of local residents. Second, we analyze the evaluation by local residents on the seaside gallery. Third, basing on these analyses, we clarify why the gallery is not so comprehensible and examine the perspective on the seaside gallery activities.

キーワード：砂浜美術館，Tシャツアート展，入野松原，エコロジカル・デザイン。

## 目 次

はじめに	28
第1章 砂浜美術館をどうとらえるか	29
1 砂浜美術館を考えるにあたっての視点	29
2 砂浜美術館の出発点	29
2-1 担い手のなかに見られる4つの志向	29
2-2 多様な志向の分析	30
3 砂浜美術館というコンセプト	30
4 課題	31
第2章 入野松原の文化史	33
1 はじめに	33
2 時期区分	33
2-1 第1期／～昭和30(1955)年	34
2-2 第2期／昭和30(1955)年～昭和47(1972)年	35
2-3 第3期／昭和47(1972)年～平成元(1989)年	36
2-4 第4期／平成元(1989)年～平成7(1995)年	37
2-5 第5期／平成7(1995)年～	37
3 西南公園	37
4 時期区分のまとめと砂浜美術館の位置づけ	39
5 砂浜美術館コンセプトの再検討	40
6 砂浜美術館の展開の可能性	41
第3章 砂浜美術館を巡る町民の意識構造	44
1 はじめに	44
2 聞き取り調査から得られた町民の意識	44
3 町民アンケートから得られた町民の意識	46
4 町民意識の構造—聞き取り調査と町民アンケートの結果から	49
5 砂浜美術館の今後に関する一考察	49
第4章 砂浜美術館活動の新たな可能性	51
1 はじめに	51
2 砂浜美術館活動の現況とその課題	51
2-1 活動の背景にあるスタッフの意識	51
2-2 活動の理想的な流れ	53
2-3 現在の活動の方向性	53
3 砂浜美術館活動の意義と可能性	54
3-1 活動の原点への再照射	54
3-2 活動の可視化の必要性	55
3-3 可視化の道具としてのエコロジカル・デザイン	56
3-4 エコロジカル・デザインの砂浜美術館活動への適用の可能性	57
3-5 エコロジカル・デザインの適用に向けて—その動きと可能性—	60
4 むすび	61
第5章 砂浜美術館活動の課題と展望	63

1	砂浜美術館活動が直面する課題	63
2	地域との関係再生の方途	65
3	むすび	67

## はじめに

本稿は高知大学大学院人文社会科学研究科の共通総合科目「総合人文社会科学研究」の一つである「総合高知研究」の2001年度参加学生・担当教官によって、同年度の調査・共同研究の報告として執筆された。1999年の研究科発足とともに始まった「総合高知研究」では1999年～2001年の3年にわたって高知県幡多郡大方町を調査対象としてフィールドワークが行われた。1999年度は9/11～9/12, 2000年度は8/31～9/1, 2001年度は9/5～9/6の日程で教官・参加学生全員で調査・合宿を行い、このほか、2000年度, 2001年度にはそれぞれ数回にわたる補足調査を行った。

これらの調査・研究はそれぞれ『総合高知研究論文集』第1号～第3号にまとめられている。本稿は第3号(2002)掲載の「砂浜美術館の再検討」を加筆・修正したものである。大方町における調査研究はこの2001年度をもって締めくくられたので、本稿は当該年度の調査・研究の報告であると同時に、3年間の大方町における研究の最終報告でもある。

なお、本稿の作成に際しては、砂浜美術館、大方町役場、大方あかつき記念館、高知はた農業協同組合大方支所、大方町漁業協同組合、入野松原保存会、四万十森林管理署、大方町遊魚船主会、高知県中村土木事務所のほか、大方町民の皆様から多大のご協力を頂いた。記して謝意を表したい。

## 第1章 砂浜美術館をどうとらえるか

### 1 砂浜美術館を考えるにあたっての視点

本章では砂浜美術館を考える前提として、一般に文化・社会運動がどのような諸関係の中に存在しているのかということをもとに考えてみたい。それが以下の諸章で分析される同美術館についての様々なアプローチの相互関係を明らかにすることになるはずである。

およそどのような活動であれその分析の視点は、

- 1) 主体（担い手）
- 2) 客体（働きかける相手）
- 3) 1), 2) の相互関係

の3者がどのような時間的な広がりの中に存在しているのか、という3点に集約できるだろう。全体構造は図示すると以下のようなになる。

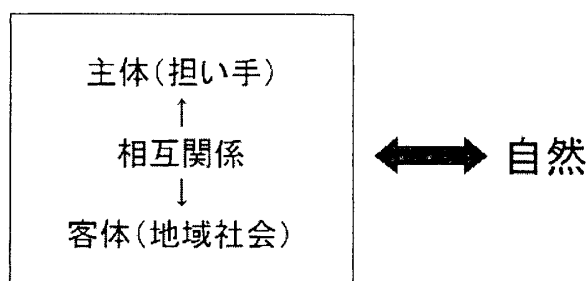


図1-1 自然と人間を巡る構造

すなわち、運動の主体となる人々（砂浜美術館の場合、初期は「砂美人連」、後期は砂浜美術館事務局）が客体としての地域社会（大方町の人々）に働きかけることによって一定の影響を及ぼす。他方、運動体は地域社会からも様々の影響（賛同、批判、担い手の補充、資金援助など）をうける。そして、さらにこのような人間の諸活動の総体は広い意味での自然との関わり（加工、利用、対峙）によって構成されている。

これらの諸要素が相互にからみあって、時間軸の中で展開し、どのような可能性と課題をもっているのかが以下の諸章で検討されるだろう。ここではその検討の前提条件を確認するため、それぞれの構成要素の特質が砂浜美術館という事例においてどのように析出されたのかを簡単に見ておくことにしよう。

### 2 砂浜美術館の出発点

#### 2-1 担い手のなかに見られる4つの志向

『砂浜美術館ノート』などを参考に、砂浜美術館を取り巻く意識状況の中にあつたものを腑分けしてみると以下のようなになる。

##### 1) 閉塞感からのイヴェント志向

砂浜美術館の担い手にとってイヴェントは「考え方を伝える手段」であつて、それ自体が目的とされている訳ではない<sup>1)</sup>。だが、受け手の側にそれを「Tシャツアート展」や「砂の彫刻展」などのイヴェントの集合体と見る見方があつたのみでなく、担い手の側にも「おもしろいことをするけん、

<sup>1)</sup> [2] p.113.

仲間に入らんか」<sup>2</sup>という「なにかおもしろいイベントをやってみたい」という意識があったことは否定できない。

## 2) 地域おこし

砂浜美術館の発想の根底には、1989年策定の『大方町振興計画』があり、その意味で、町おこし、地域おこしの一環として位置づけることができる。特に町職員としてこの活動に加わった人々のなかにはこの意識は根強くあったと考えられる。しかし、担い手のなかに「わたしたちは、いま砂浜美術館をまちづくり以上のもっと深い意味をもったものとして考えるようになっていきます」<sup>3</sup>という、町おこしをこえる意識が芽生えてきていることも無視できない。

## 3) 都会志向からの転換

「砂浜美術館構想」の冒頭には以下のようにある。

15年くらい前のこと、地元の高校を卒業して、この地域に就職したわたしたちは、マスコミから流れてくる都会の情報におぼれ、いつも都会を追いかけ、あこがれてきた。(中略) 時が流れ、少し大人になったわたしたちは、いつも虹のように逃げて行く都会に気づき、「ちょっと待てよ……」「何かおかしいぞ」と立ち止まった。<sup>4</sup>

砂浜美術館の発想は地域からの発想というよりむしろ、都会のアイデアマンによってもたらされたものであるが、地域の運動の担い手の側に、それを受け入れるこのような発想があったことを確認しておく必要がある。

## 4) 松枯れ(直接的には松くい虫による)に対する危機意識

「振興計画」には「松食い虫の大きな被害にあい、壊滅的な状況」<sup>5</sup>だった松原の再生が謳われている。松原の再生、保存の活動は直接的には「松原保存会」によって担われてきたが、このような松原=砂浜の状況に対する危機意識、松原再生への願いは、砂浜美術館活動の担い手にも共有されていたのである。

### 2-2 多様な志向の分析

1) ~ 4) の志向が担い手(砂美人連、町、商工会 etc) とそれをとりまく人々の中に混在していたと考えられる。これらの雑多な志向を前節の観点から整理すると次のように位置づけることができる。

1) 主体の側の動機: 主体, 2) 地域社会の要請: 客体, 3) 時代背景: 歴史, 4) 自然との関わり: 自然との対峙。

あえて整理すればこのようになるが、これらの志向は未分化で明確に自覚されないまま、個々の人々の意識のなかに混在していたと考えられる。それは、人を行動に駆り立てるエネルギーを供給するものであるが、それが「運動体」としての明確な形を取るためには、核となる明確な理念が必要であった。

## 3 砂浜美術館というコンセプト

この雑多な理念に対して、「砂浜が美術館である」というコンセプトが「外から」もちこまれるこ

<sup>2</sup> [1] p.20.

<sup>3</sup> [1] p.16.

<sup>4</sup> [1] p.16.

<sup>5</sup> [1] p.17.

とになる。そして、当初はさまざまな志向と方向性をもった複合体であった「大方町における人と浜辺との関わり」が「砂浜美術館」という一つの言葉に収斂してゆくことになる。砂浜美術館活動という特異な運動の牽引力の源にはこのアイデア、言い換えると、この言葉の「力」があるといっ

ていいだろう。

このように、砂浜美術館を支えているのは「砂浜が美術館である」という発想の転換であるが、この発想の転換の背景にあるものについて2つの要素を指摘しておきたい。

その第一は時代の趨勢である。「ハードからハードへ」を謳う、『大方町総合振興計画』が策定され、砂浜美術館活動が出発した1989年はまさにバブル経済の末期であり、1990年代のバブル崩壊期以降に一般化する高度成長、バブル経済批判の発想を先取りしているといえるだろう。

第二は伝統的な発想との共通点である。砂浜美術館に通ずる発想を過去に求めるとすれば一つは「見立て」であり、もう一つは「借景」である。

見立てとは、たとえば絵画の領域では歴史や伝承的故事を題材としながら、時代概念や風俗にとらわれず、当世風に翻案して描いた絵（見立て絵）を指す。江戸時代の浮世絵に多いが、あるものを別のものと見なして楽しむ遊びの精神が背景にある。つまり、砂浜を美術館と「見立て」、そこに見える風景を「絵画」（文字通り picturesque な風景）と「見立てる」という視点は「砂浜美術館」の発想と通底するものである。

一方、借景とは日本庭園の造形法の一つで庭外の風景を景観として利用すること、あるいはその風景をさす。修学院離宮、円通寺などの庭園がその代表例であり、自然の景観をそのまま人工物の中にとりこむ手法である。大方町の砂浜とそこに吹く風といった自然物を、Tシャツのような人工物を持ち込むことによって際立たせ、全体をひとつのアートとして再編成するという考え方はこの借景とも相通ずるものである。

上に述べたような事柄を背景に、もう一つの大きな発想の転換が行われた。それは本来アート（人工物）の集積である「美術館」という名称を「自然物」に与えたことである。そして、雑多な志向を背景とした、それ自体としては不安定なイベントの複合体に「砂浜美術館」という「しっかりした実体をもったもの」の名称が与えられることによって、安定した実体のイメージが付与されたと考えられる。

#### 4 課 題

だが、このような「ことばの力」は他方で一つのマイナス面を持っていた。それは、コンセプト自体の難解さからくるものである。このような難解さがこの考え方の「普通の人々」への浸透を困難にし、その結果、いわばコンセプトのスローガン化＝単純化が起こることになる。すなわち、発足時の雑多な志向に示されている「大方町における人と浜辺との関わり」の様々な可能性のうち、イベント活動の集積としての「狭義の砂浜美術館活動」のみがクローズアップされる傾向が生じる。それによって、この「大方町における人と浜辺との関わり」の総体（それを「広義の砂浜美術館」と呼んでもいいかもしれない）のもつ多様な可能性が見失われることになる。

本論文は、様々な側面をもつ「人と浜辺の関わり」という原点に返って「狭義の砂浜美術館」を、より広い時間、空間の中に位置づけ、再構築しようという試みである。そしてそれを通じて砂浜美術館の新しい可能性を探ろうとするものである。

第2章「入野松原の文化史」では大方町における「人と浜辺の関わり」が歴史的側面から考察される。また、第3章「砂浜美術館を巡る町民の意識構造」ではその浜辺を中心に展開される砂浜美術館活動を大方町民がどのように捉えているのかを整理する。これらを踏まえて第4章「砂浜美術館活動の新たな可能性」では、砂浜美術館というコンセプトを大方町の現実の時空の中にどのよう

に根付かせるかという課題が、エコロジカル・デザインという概念を手がかりに探求される。そして、最後にそれらの考察を総括して、第5章「砂浜美術館活動の課題と展望」では生業（社会的・経済的リンク）と生活（文化的・宗教的リンク）という2つのリンクを通じた自然と人との関わりという大きな枠組みの中で、砂浜美術館の発展の方向を展望する。

本稿が、今後の砂浜美術館の更なる発展の一助となれば幸いである。

(小澤 萬記)

### 参 考 文 献

- [1] 砂浜美術館 (1997) 『砂浜美術館BOOKS 1 砂浜美術館ノート 砂浜美術館の記録 1989-1996』 砂浜美術館
- [2] 松本敏郎 (2002) 「21Century 砂浜美術館構想」 高知大学大学院人文社会科学研究科『平成13年度総合高知研究論文集』 pp.111-117



## 第2章 入野松原<sup>6</sup>の文化史

### 1 はじめに

入野松原には、歴史的伝説が多く残る。宝永4年（1707）11月の大津波の復旧に松を植林し松原が生まれたという伝説<sup>7</sup>や尊良（たかなが）親王<sup>8</sup>と小袖貝伝説<sup>9</sup>などがある。また、白砂青松の風景美は『土佐物語』<sup>10</sup>に長宗我部元親の言葉として記述されている<sup>11</sup>。近年では、表2-1に示したように、多くの公園指定を受け、大方町ではその自然を生かした町づくりを目指している<sup>12</sup>。

現在、地域振興や観光資源の面が強調されるが、かつての入野松原は住民の生活に密着し、不可欠なものだったはずである。大方町の人々は、生活の場として、入野松原といかに関わり、また、どのような価値を見出してきたのだろうか。本章では、過去の約100年間における住民と入野松原との関わりの変化を考察し、入野松原の文化を土台とした砂浜美術館活動の展開の可能性を探っていく。

表2-1

大正11（1922）年	防風保安林指定
昭和3（1928）年	史跡名勝天然記念物指定
昭和31（1956）年	県立自然公園指定
昭和47（1972）年	土佐西南大規模公園指定

聞き取り調査（以下、ヒアリング）をもとに考察を進めるが、ご協力いただいた方（以下、インフォーマント）のなかで、特に本章と関係の深いインフォーマントのデータを表2-2にまとめる。

ヒアリングによって判明した事柄については、文の最後に、どのインフォーマントから聞き取った事柄か明記する。

### 2 時期区分

入野松原の過去約100年を第1期から第5期に区分する（表2-3）。

<sup>6</sup> 本稿では入野の浜と松原をあわせて入野松原と表す。

<sup>7</sup> [5] pp. 540-541.

<sup>8</sup> 尊良親王 後醍醐天皇の子。元弘2年（1330）に元弘の変により土佐國幡多に配流。翌年帰京する。[13]（巻九十九）[15]（下巻第十六）等に記述がある。

<sup>9</sup> [6] pp. 64-65, [1] p. 259.

<sup>10</sup> [10] には、「土佐における最大の軍記もの。長宗我部氏の盛衰興亡を叙し、一条氏、土佐落去に連なる応仁元年（1467）から、山内氏高知城構築の慶長八年（1603）にいたる20巻。著述は吉田孝正で宝永5年（1708）に完了している」とある。

<sup>11</sup> [1] p. 262.

<sup>12</sup> [3] には「『山も川も海も人も、みんな宝。もっと大事に。もっと生かして。』私たちの町には、美しい自然があります。その自然の恵みを糧に生きる人がいます。私たちは、この町の宝を大切に守り、今に生かすことを町づくりのテーマに自然と共生する町づくりを進めています。」という文言がある。

表2-2 インフォーマントのデータ

氏名	備考	氏名	備考
[A]	40代男性・砂浜美術館「砂像」関係者	[H]	89歳男性・入野万行地区在住
[B]	50代男性・砂美人連関係者	[I]	79歳男性・新町地区在住
[C]	70代男性・松原保存会関係者	[J]	66歳男性・早咲地区在住
[D]	59歳男性・大方町漁協関係者	[K]	66歳男性・芝地区在住
[E]	40代男性・大方町漁協関係者	[L]	60代男性・浜の宮地区在住
[F]	高知県土木課関係者	[M]	59歳男性・本村地区在住
[G]	高知県中村土木事務所関係者		

表2-3 時代区分

区分	年代	主な出来事
第1期	～昭和30(1955)年	自然と住民の生活が密着
第2期	昭和30(1955)年～昭和47(1972)年	入野飲屋街の出現
第3期	昭和47(1972)年～平成元(1989)年	土佐西南大規模公園指定
第4期	平成元(1989)年～平成7(1995)年	砂浜美術館登場
第5期	平成7(1995)年～	土佐西南大規模公園指定計画変更

### 2-1 第1期／～昭和30(1955)年

第1期には住民の生活と入野松原とが密着していた。松原は住民の入会地として利用され、住民は松原に入り、かまどや風呂などの焚き付け用に薪や松葉を取っていた。人々が地面の松葉や下草をかきとるために地面は草などに覆われず地表が露出していた[C][H](図2-1)。そのため、現在では見られなくなった松露という香りのよいキノコも生息しており、当時は子どもたちが焼いて食べていた[C][K]。また、涼を求めてごきを持って松原で昼寝という風景も見られた[H]。つまり、人が利用することで松原は維持されており、人と自然とのバランスが保たれていた時期といえる。

ただし、国有林では営林署職員が出入りを禁止し、見張りを立てたという話もあった[H]。桑田(1927)には、すでに国有林のため清掃がなされず美観を損ねているという報告があり、住民の利用が美しい松原を保っていたことを裏付ける<sup>13</sup>。

一方、砂浜では地引網が行われ<sup>14</sup>、農閑期には女性・子どもはロクロ(地引網を引き上げる機械)

<sup>13</sup>[8] p.67「しかも、国有林なるを以て清掃しあらず為に多少美観を損す。」とある。

<sup>14</sup>[5] pp.1029-1030

を回し、男は櫓をこいでいた [D] [H]。地引網ではちりめんや、小さい太刀魚が取れ、浜にいる商人が取れた魚を買い付けていた [H]。また、砂浜には塩田があり、製塩が行われていた<sup>15</sup>。漁師が副業にしていたこともあった [D]。この海域は、現在、「巻きだし」のため遊泳禁止であるが、当時は泳ぐ子どもたちも多く、子どもたちの遊び場でもあった [D] [E] [H] [J] [K]。



図2-1 第1期 松原の様子

## 2-2 第2期／昭和30（1955）年～昭和47（1972）年

第2期には、高度経済成長や生活スタイルの変化などから、住民と入野松原との関係に変化が現れる。昭和30年ごろ、松原には海の幸が安く食べられる入野飲屋街（筆者による仮称）が現れた [D] [J] [M]。松原のなかでアイスクャンデーを売った店が始まりとされる [H]。ナガレコ（貝）が1皿200円程で食べられ、中村などからも多くの人が集まり、地元の人と喧嘩になることもあった [M]。[M]氏は給料の大部分を入野飲屋街で使った時期もあったという。その他、モーターや旅館などもあり、ここは大方町の歓楽街であった [D] [H] [M]。なお、ヒアリングから入野飲屋街の立地を再現した（図2-2）。

さらに、「お節句の時などには浜に来た」「子どもたちも夏には海で泳ぎ、冬には流木を集めてたき火をした [M].」という。しかし、県立自然公園に指定されたところから松原に有刺鉄線<sup>16</sup>が張られ、松原に人が入りにくくなり [M]、人と入野松原との関係は徐々に希薄になっていく。

<sup>15</sup> [5] pp.1070-1084

<sup>16</sup> 県立公園指定と関係があるらしい。

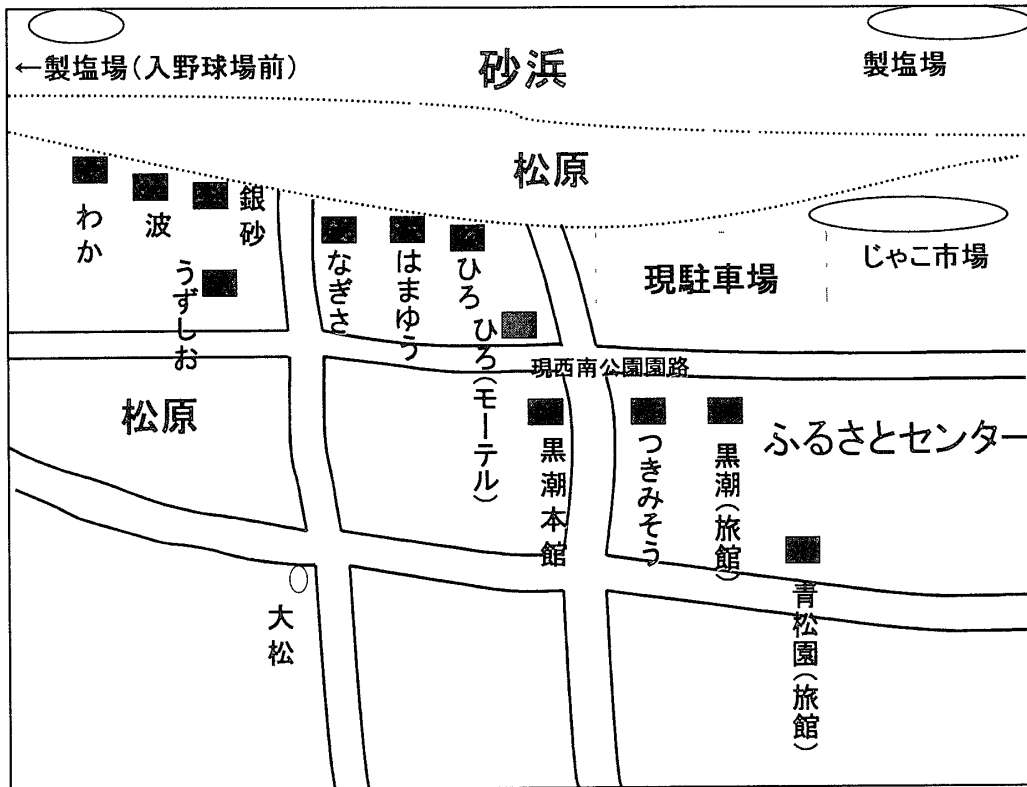


図2-2 [M]氏による飲屋街再現図(推定)

### 2-3 第3期/昭和47(1972)年~平成元(1989)年

第3期には入野松原の利用が激減し、人と自然とのバランスが崩れる。昭和47(1972)年、入野松原は土佐西南大規模公園(以下、西南公園)に指定された。西南公園は県が設置主体であり、これにともなう用地買収によって入野飲屋街は消滅する<sup>17</sup>。砂浜美術館(1997)では、西南公園に指定されたことで、入野松原が遠い存在になったと指摘されている<sup>18</sup>。ヒアリングでも「飲屋街を残しておけばよかった[D][M]」という声が多く聞かれた。さらに、昭和51(1976)年まで松原の中にあった大方中学校が移転したこともこれに拍車をかけた。

西南公園では、当時のレクリエーションブームと建設ラッシュにのり、サイクリングロード、ふるさとセンター、シャワー室が相次いで建設された。砂浜には、このころから地元サーファーが現れた[E]。また、松原には、ゴミの不法投棄が目立つようになり(図2-3)、松くい虫の被害も出始める。松原の中を歩くと枯れた大きな松の切り株を見ることができる(図2-4)。この松は大方中学校の歴代の卒業生が卒業記念の写真を撮った場所でもあった[M]。現在、殺虫剤の散布や栄養剤を打ち込むなどの松枯れ対策が行われているが、根本的な解決にはなっていない。

<sup>17</sup> [5] p.455 「また、その当時有名になっていた入野の浜の飲食店街の買収があった。(中略) 人家を隔てた歓楽の地に相応しい場所とあって、しかも海辺という風致にひかれ、そこに来る遊客は、町内はもちろん中村周辺にも及んで一時は随分繁盛であった。しかしそこは、この健全であるべきレクリエーションゾーンの中心地となる位置である。なんとしても公園用地として確保したい場所であった。根強い困難を予想して買収構想が始められた。」

<sup>18</sup> [11] p.36 「●実をいうと、入野の浜は1972年に県の西南大規模公園の指定を受けたのですが、それ以前は中学校も松原の中にあつたし、遊山といえば松原、遠足も松原で、入野の浜は町民にとってとても身近な場所だったんです。公園に指定されたことで、中学も、居酒屋までもほかに移ることになった。県の公園になることで、逆に遠い存在になってしまったわけです。」

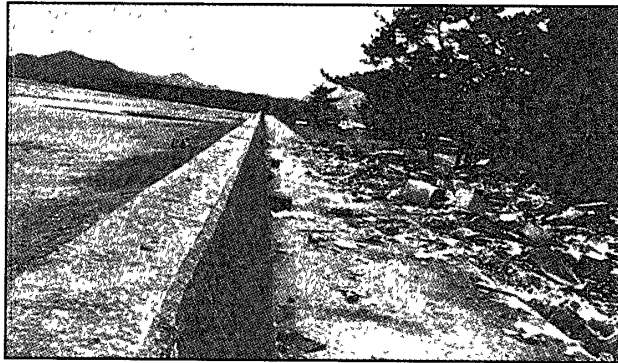


図 2 - 3 ごみの不法投棄

注)「入野松原パンフレット」から転載



図 2 - 4 松くい虫被害（枯死松の切株）

#### 2 - 4 第 4 期／平成元（1989）年～平成 7（1995）年

第 4 期には入野松原の価値が再発見され、利用され始める。西南公園の整備（キャンプ場・園路）は進むが、平成元（1989）年に砂浜美術館と松原保存会<sup>19</sup>が登場する。町の施策として砂浜の侵食を防ぐための人工リーフの建設も始まる<sup>20</sup>。現在、この人工リーフの内側を海水浴場にする計画もある。松原保存会や砂浜美術館、役場などによる入野松原の利用が活発となる。

#### 2 - 5 第 5 期／平成 7（1995）年～

第 5 期には西南公園が、全体計画変更によって、入野松原の自然保護に向けて動き出す。平成 7（1995）年に西南公園の全体計画が見直され、砂浜美術館や松原保存会に遅れながらも、入野松原の環境保護と環境文化を重視するエコミュージアム構想が掲げられた。具体的には、園路<sup>21</sup>の計画変更が行われ、これをエコロードと称している。また、河口に野鳥観察ゾーンを設けたり、湿地帯の保護が行われはじめる。その他の試みとして、ラッキョウ畑の保護、体験農場の整備、ワークショップの導入があげられる [F]。

### 3 西南公園

西南公園は建設省（現国土交通省）の管轄であり、設置主体は県である。担当部所は公園下水道課公園緑地班であり、高知県中村土木事務所がおもに建設を担当している。

ここでは、特に砂浜美術館との関係が深いと考えられる平成 7（1995）年の全体計画変更以降の整備状況について述べる。なお、それ以前については、表 2 - 4 に挙げるにとどめたい<sup>22</sup>。

最近の整備状況は、東部の加持川下流域に野鳥の観察ゾーン（松原大橋周辺）が設置され（図 2 - 5）、また、自動車用の橋（月見が浜橋）も新設された。月見が浜橋は景観に配慮して車道と歩道の高さをずらす新工法で架けられている [G]。また、加持川の東側の湿地帯は野鳥などのすみかになっており、ここを保護する試みが行われている。特に、ワークショップを開き湿地帯付近（図 2

<sup>19</sup> 松原保存会は町有志、行政等で結成した。発起人は営林署OBである。活動は清掃を毎年11月の第3日曜日に行う。その他町職員のボランティアによる植林活動なども行っている。

<sup>20</sup> 現在270メートルほどの人工リーフが砂浜の沖合に設置されている。

<sup>21</sup> 公園内の車道、歩道のこと。

<sup>22</sup> [9] より改表。

－6)の整備について広く意見を求めている。ワークショップには、地元の興味のある人や高知市からも参加する人がおり、砂浜美術館のメンバーも加わっている [G]。

表2-4 西南公園事業経過

昭和47年4月	都市計画決定	昭和60年	大方：ゲートボール場完成
昭和47年8月	都市計画事業認可	昭和61年10月	都市計画事業認可変更
昭和50年7月	都市計画事業認可変更	昭和61年12月	都市計画変更
昭和57年11月	都市計画変更	昭和63年2月	都市計画事業認可変更
昭和57年11月	都市計画事業認可変更	昭和63年10月	大方：サッカー・ラグビー場完成
昭和58年3月	大方：サイクリングロード完成	平成3年2月	大方：キャンプ場完成
昭和58年11月	大方：ふるさと総合センター完成	平成5年7月	大方：テニスコート完成
昭和59年	大方：シャワー室及び便所の設置	平成6年10月	体育館完成



図2-5 野鳥観察ゾーン

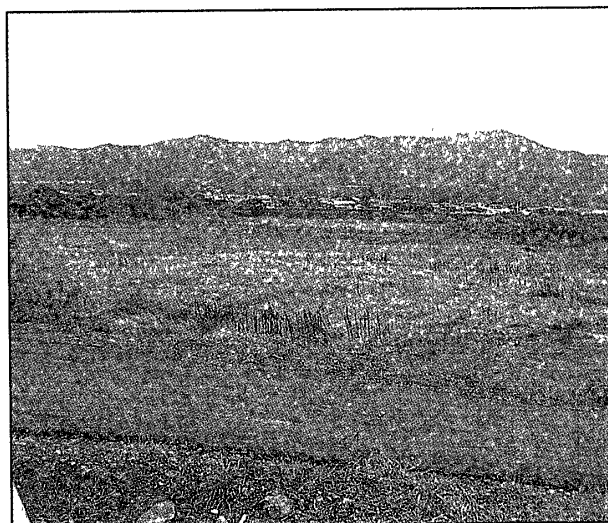


図2-6 湿地帯

さらに、園路整備にも大きな変更が認められる。変更前の園路は2車線であった。航空写真を見ても多くのラッキョウ畑をつぶして園路ができていることがわかる(図2-7)。これは、橋本高知県知事の意向もあり(本来は園路計画中止を指示したという)、1.5車線に変更された(図2-8) [G]。その他、現状のラッキョウ畑を残すフラワーパーク構想等もたてられている。

西南公園は自然とのバランスを考慮した公園整備への転換を進めているが、一方でラッキョウ畑に物産センターを建設する計画もあった<sup>23</sup> [D] [F]。また、園路整備自体が必要なのかという疑問も残る。このように、自然保護と箱物建設の間で西南公園は揺れ動いている。

<sup>23</sup> 過去に土地所有者が建設を条件に土地を提供したという背景があったようだ。しかし、現在ではラッキョウ畑を残す方向で話が進められている。この点については、第4章を参照。

ここまで述べたように入野松原を管理・整備しているのは西南公園である。つまり、入野松原のハードは西南公園が担い、ソフトは砂浜美術館や松原保存会が担うという関係を見出すことができる。

西南公園関係者は砂浜美術館について、「ソフトだけというのは面白い」という[G]。ソフトを担う砂浜美術館は、自然保護のためにも、ハードの西南公園と、より密接な連携が必要である。ワークショップ等で、砂浜美術館のソフトが生かされるように働きかけることが重要と考える。西南公園に砂浜美術館のソフトが生かされれば、その存在価値を高めることにつながるからである。

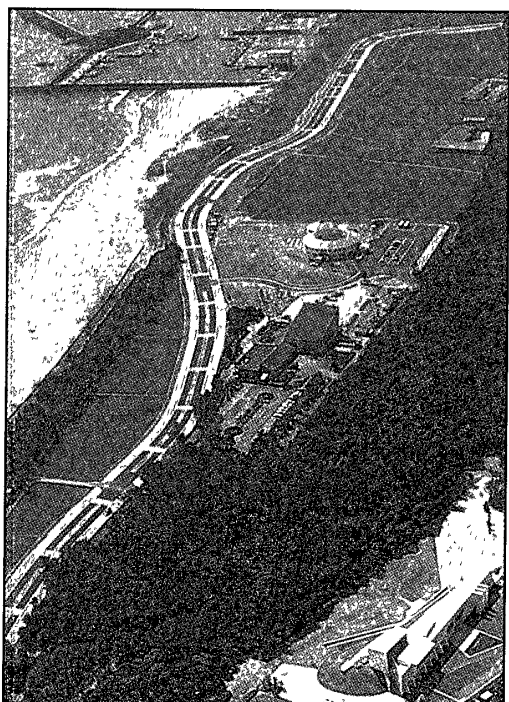


図2-7 園路航空写真



図2-8 変更後の園路

注)「大方あかつき館パンフレット」から転載

#### 4 時期区分のまとめと砂浜美術館の位置づけ

住民の入野松原の利用という視点で史的推移をまとめると、図2-9のようになる。実線は人と入野松原との関係が深かった期間、点線は関係が薄れた期間である<sup>24</sup>。第2期から第3期にかけて、生活スタイルの変化などから、生活のための利用が減少する。また、入野飲屋街が消滅し、人が集まる場としての機能も失われてしまった<sup>25</sup>。その結果、ゴミの不法投棄などが社会問題化した。第4期になると、状況が変化する。砂浜美術館活動が始まり、同様の動きとして、松原保存会や人工リーフ建設が始まる。

この流れから砂浜美術館の意義を考えると、砂浜美術館は、単なる美術館ではなく、第3期に崩れた入野松原との関係を取り戻す活動といえる。人が集まる場としての機能を失った入野松原を、

<sup>24</sup> 西南公園は箱物建設が行われた第3～4期を人と入野松原との関係が薄い時期と判断した。

<sup>25</sup> [11] p.36「○すると公園以前の入野の浜は、町民のレクリエーションの場所だったり、美術館以外にも沢山の機能があったわけですね。●旅館もあったし、アベックもたくさんいました。○恋を語る場所でもあった。●恋を含めて入野の浜は町民にとって生活の一部だったんです。公園に指定されたことで、そうした生活感みたいなものが排除されてしまったんですね。」

活動の場として再生させようとしたものであろう。砂浜美術館 (1997) p.40には、

結局、砂浜美術館はあるとき突然できたものではなくて、大方町にあった地域文化が、砂浜美術館というかたちになって立ち上がったのではないかと僕は考えています。(傍線筆者)とある。この「大方町にあった地域文化」とは、第1・2期にあったような、住民による入野松原の利用や、子どもたちの遊び場、若者が集まり活動する場としての文化と解せないだろうか。つまり、砂浜美術館は若者が砂浜に集まり一つの企画を楽しみながら運営するという大方町の地域文化の形と考えられる<sup>26</sup>。

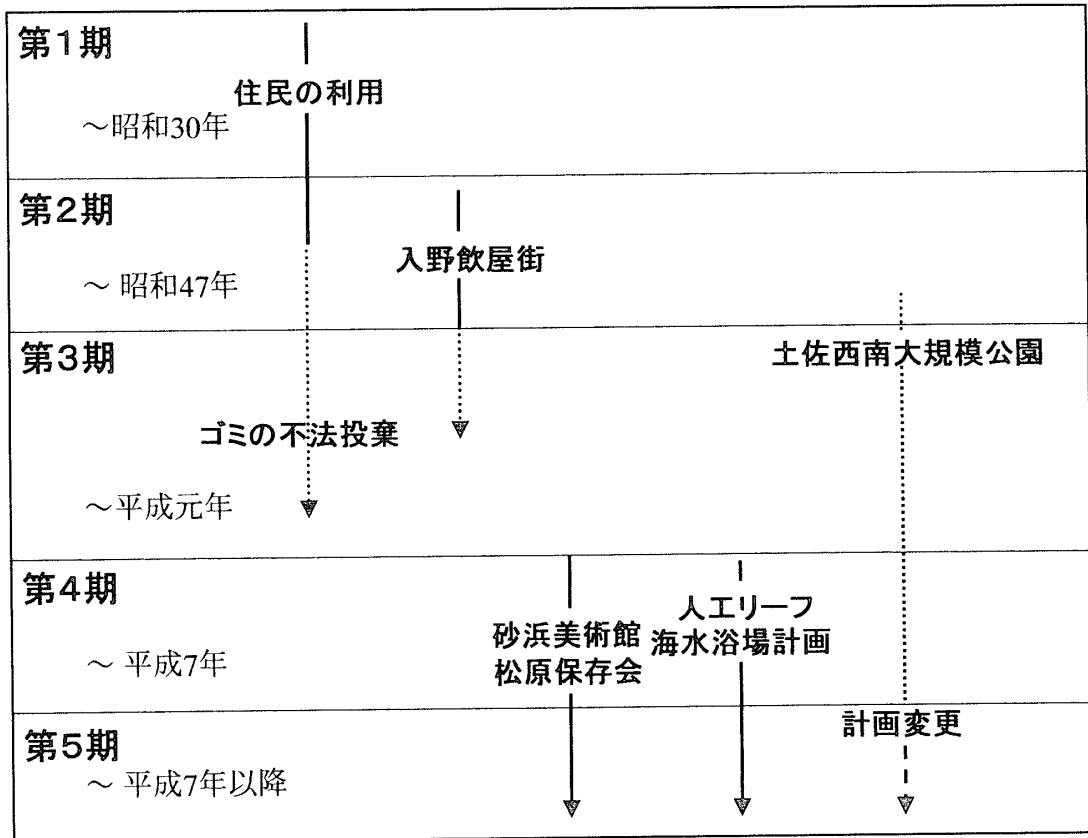


図2-9 「入野松原」の史的推移

## 5 砂浜美術館コンセプトの再検討

砂浜美術館は、町内からの関心が低いといわれている(第3章を参照)。一つの解決策として、砂浜美術館活動を通じて経済効果をあげようとする動きがあり、地元に関心を与えることで住民の関心を高めようとしている。

しかし、関心の低さの原因として、コンセプトの問題という視点が欠けているように思われる。コンセプトの問題を解決することなしに、住民の理解は得られない。そこで再度、砂浜美術館のコンセプトについて、前節までに述べた入野松原の「地域文化」という視点から考察する。

砂浜美術館のイベントには、代表的なものとして、Tシャツアート展・「砂像」などがある。これ

<sup>26</sup> [11] p.20 立ち上げ期について以下のような記述がある。「青年団や商工会青年部、農業青年の集まりである4平成クラブなどの主だったメンバーに声をかけていきました。かけられた中には、ろくな説明もされずに『おもしろいことするけん、仲間に入らんか』と言われた人もいます。こうしてできたのが『さざなみかい』というTシャツアート展の実行グループです。」



らの中心にあるコンセプトは「ものの見方を変える」「そこにあるものを作品に見立てる」ということであろう。ヒアリングで、砂浜美術館スタッフは「伝えたいのは考え方」とし、例えば、「砂浜の鳥の足跡を作品と捉える」という「考え方」を伝えることが目的ということ述べている。

そのきっかけとなるものが各種のイベントである<sup>27</sup>。例えばTシャツアート展は砂浜にTシャツを干し、その全体の風景を作品と捉える。その他、らっきょうの花見やキルトコンテストも、そこにある風景（または、自然と持ち込んだ人工物との融合した風景）を、見る者の意識を変えることで、一つの作品として見せようとするものである。第1章でも述べられているように、これらのイベントは普段は気づかずに見落としてしまう「視覚的な自然」に注目し、作品に見立てるという「視覚的な認識の転換（見立て）」が行われているとみることができる。

しかし、「砂像」や花火大会、キスのなげ釣り大会などは、「ものの見方を変える」ということは共通するものの、若干コンセプトが異なると思われる。これらのイベントは「地域文化の認識の転換」にもとづくものであろう。例えば、入野松原は子どもたちの遊び場であった。多くの子どもたちは砂浜で砂遊びや釣りをした。地引き網であがった魚を買うマーケットも砂浜にあった。前節までで述べたように入野松原は住民にとって遊び場であり、酒を飲み、魚を買う場であり、生活に密着した場であった。これらの「地域文化」を形にしたものが「砂像」や花火大会・釣り大会などのイベントといえる。

たとえば、「砂像」の中心メンバーの一人は、「砂像製作に携わり、自分の楽しみを見つけた[A]」<sup>28</sup>という。そして、小学校の砂場や図工で、砂像づくりを教えている。また、万行地区の[H]氏（89歳男性）は砂の彫刻展（「砂像」）に作品を出展した。「砂浜美術館はあまり良いとは思えない」といいながらも、もらった表彰状を嬉しそうに見せる表情が印象的であった。また、[D]氏は「砂浜美術館のメインは「砂像」というイメージがある」という。このように砂浜美術館における「砂像」への町民の関心は高い。また、現在、「砂像」のグループは、砂浜美術館を離れて、各地の砂像大会に出場し優秀な成績を収めている。

つまり、「砂像」は「砂遊び」という「地域文化の認識」を転換させることで、町民にも注目される新たな「砂像」というイベントに生まれ変わったものと解釈できる。砂浜にある「地域文化の認識」を転換することによって新しい文化としたといえよう。

以上のように砂浜美術館のイベントは、「ものの見方を変える」を上位コンセプトとして、

①「風景に対する視覚的認識の転換」（以下、①）

②「地域文化に対する認識の転換」（以下、②）

という二つの下位コンセプトに分離することができる。

## 6 砂浜美術館の展開の可能性

前節では砂浜美術館のコンセプトを二つに分離した。本節ではこれらのコンセプトがどのように扱われてきたか、また、今後どのように扱われる可能性があるか述べる。

砂浜美術館のコンセプトを持ち込んだのは町外のデザイナーである。デザイナーは大方町の文化的な土台を持たないために、②よりは、①に重点をおいたのであろう。たとえば砂浜美術館（1997）では①についての記述が中心であり、「地域文化」に関する記述は少ない<sup>29</sup>。また、広報活動として、住民にとって身近な②より①の方が重視されてきた。そのため、町内の関心も高まらなかったと考

<sup>27</sup> [17]「イベントは考え方を伝える手段」とある。

<sup>28</sup> 現在は仕事の有給を利用してまで、海外遠征などを行っている。

<sup>29</sup> ②に関連するものは [16] にまとめられている。[16]の企画・執筆には砂浜美術館が関わっている。

えられる。

砂浜美術館のコンセプトは都会にない美しい自然の価値を発見しようというものである。それは、逆説的に町外（都会）からの視点を持ち込むことを意味している。その証拠に、町内よりも町外（都会）に注目された<sup>30</sup>。

そもそも砂浜美術館（1997）や「砂浜美術館リーフレット」などのデザインは都会的なセンスで作られている。これと住民の意識との間にギャップが生じたことが、「我が町の砂浜美術館」として位置づけられなかった理由であろう。

このことは、「砂浜美術館リーフレット」（図2-10）と高知県安芸郡馬路村<sup>31</sup>の情報発信とを比較すると明確になる。馬路村は「田舎を売る」という方法をとったのに対し、砂浜美術館は都会的なセンスでアレンジする方法を用いたといえる。大方町の住民にとって、この都会的なセンスと実際の生活との間に、大きなギャップがあったと考えられる。

こうして、住民と砂浜美術館とは遊離したものになったと考える。住民の理解を得るためには、より住民の実態に応じた活動を行わなければならない<sup>32</sup>。文化史的な背景や地縁組織などを利用したイベントが必要であろう。「地域文化に対する認識の転換」を重視し、新たな文化を創造する活動を住民の目線で行うことが必要と思われる。

砂浜美術館にも田舎的なものが無いわけではない。「砂浜美術館待夢子」<sup>33</sup>に連載された砂浜日記などは田舎の飾らないセンスの流れをくむものである（図2-11）。

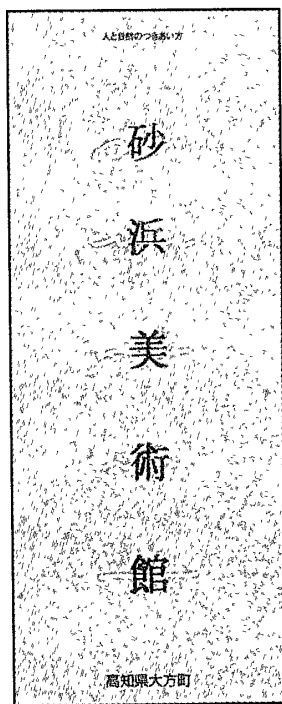


図2-10 「砂浜美術館リーフレット」  
注) 「砂浜美術館リーフレット」表紙

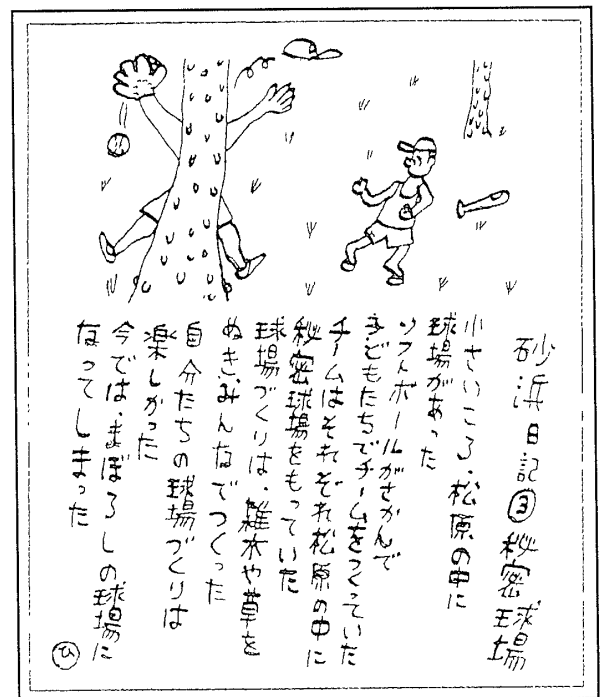


図2-11 「砂浜美術館待夢子」砂浜日記  
注) 砂浜美術館（1997）より転載

<sup>30</sup> 2001年度のTシャツアート展ではボランティアを募集したが、町内からのボランティアは集まらなかった。

<sup>31</sup> 特産品のゆずを使ったジュース「ごっくん馬路村」で大成功を取めた町。第5章、および[7]参照。

<sup>32</sup> [14]「すなわち、外部の目と内部の目の政策の違いは、外部の目がある地区を“公園”にしようとしたときに、内部の目はその地区を庭にするという発想の微妙な違いがある。この微妙な差異をおさえないと（中略）さらにズレた施策の愚を重ねることになる。」

<sup>33</sup> 砂浜美術館ニュースレター。

このように、砂浜美術館が町外に向けて、第2節で述べたような大方町の文化を発信し、その自然と同じく、文化についても町外から高く評価されれば、住民は見過ごしていた文化を発見できる。つまり砂浜美術館は経済的な役割のみならず、大方町の文化的発展に寄与する可能性を秘めているといえる。

これまで砂浜美術館は視覚的な美しさに重点を置いていた。今後は、大方町の文化的な価値を発掘し、発信して行くことが砂浜美術館の発展の鍵になる。

（安岡 浩二）

### 参考文献

- [1] 岩原信守 校注（1997）『土佐物語』 明石書店
- [2] 大方町「大方あかつき館パンフレット」 大方町
- [3] ——（1999）『大方町総合振興計画』 大方町役場企画管理課
- [4] ——「入野松原パンフレット」 大方町
- [5] 大方町史改訂編纂委員会（1994）『大方町史』 大方町
- [6] 大方町史編集委員会編（1963）『大方町史』 高知県幡多郡大方町教育委員会
- [7] 大歳昌彦（1998）『「ごっくん馬路村」の村おこし』 日本経済新聞社
- [8] 桑田精一（1927）「入野濱と海嘯碑」『土佐史談』十九号 土佐史談会
- [9] 高知県（1995）「土佐西南大規模公園パンフレット」
- [10] 高知県歴史辞典編集委員会編（1980）『高知県歴史辞典』 高知市民図書館
- [11] 砂浜美術館（1997）『砂浜美術館 BOOKS 1 砂浜美術館ノート 砂浜美術館の記録 1989-1996』 砂浜美術館
- [12] ——「砂浜美術館リーフレット」 砂浜美術館
- [13] 徳川光圀著・山路弥吉訳・西田敬止校正（1914）『訳文大日本史』 民文庫刊行会
- [14] 鳥越皓之（1997）『環境社会学の理論と実践』 有斐閣
- [15] 平泉澄（1936）『大鏡・増鏡』 春陽堂
- [16] 財団法人自然環境研究センター制作（1998）『ほっちほっち』 財団法人自然環境研究センター
- [17] 松本敏郎（2002）「21Century 砂浜美術館構想」 高知大学大学院人文社会科学部研究科『平成13年度 総合高知研究論文集』 pp.111-117
- [18] 山下宏明校注（1977）『新潮日本古典集成 太平記』 新潮社
- [19] 吉永虎馬（1928）「史蹟名勝天然記念物」『土佐史談』二十二号 土佐史談会

### 第3章 砂浜美術館を巡る町民の意識構造

#### 1 はじめに

砂浜美術館は、発足から13年が経過した。無論その存在は、地元の人たちにとってすでによく知られたものとなっている。では、町民はどのようにこの活動を捉えているのだろうか。

筆者らは1999年から3年にわたって大方町でフィールド・ワークを行い(うち筆者が直接に関わったのは最終年度である)、多くの方々から砂浜美術館についてのお話を頂いたが、これまで地元の方々から砂浜美術館をどう捉えているかについてはまとまった考察を行っていなかった。そこで本章では、砂浜美術館に対する町民意識の構造について述べ、その今後のあり方を考えたい。

分析にあたっては、次の2つの材料をもとに検証を行った。1つは、筆者らが2001年の7月から9月までに行った大方町での聞き取り調査の結果である。もう1つは、町民アンケートの結果である。これは、大方町が町の振興計画の策定において住民の意見を取り入れ反映する為に、1997年12月に行ったアンケート結果<sup>31)</sup>の一部と、それをもとに筆者らで一部分析を加えたものである。

以下、第2節では聞き取り調査の結果について、第3節ではアンケート結果について、第4節では2つの材料から得られた全体的な町民意識の構造について、最後に第5節では砂浜美術館の今後について考察を述べている。

#### 2 聞き取り調査から得られた町民の意識

まず、聞き取り調査の結果について述べる。聞き取り調査では、大方町内のたくさんの方々にご協力頂いたが、砂浜美術館に対して一般の町民と同じような立場からの意見や考えをまとめる為、ここではスタッフとして直接活動に深く関わっていないと考えられる次の13名の方々の聞き取りをまとめた。松原保存会関係者4名(年齢は70代が1名、他の3名の方々の年齢は不明だが、おそらく30代から50代前後)、入野漁協関係者2名(59歳が1名、もう1名は不明だがおそらく30代から40代)、入野万行地区の男性1名(89歳)、町内の地区長6名(50代から70代)である。女性の意見も取り入れたかったが、今回は対象者が全員男性であった。

調査中にお話頂いた内容の中から、砂浜美術館に関する意見をまとめ、次の4つの項目、①砂浜美術館やそのコンセプトに対する認識、②砂浜美術館と住民とのつながり、③運営資金と砂浜美術館に関わる青年層、④その他の意見に分類した。以下、項目ごとに具体的な意見と、それらから考えられる意識構造について述べる。なお、本節では、できる限り聞き取り調査で得られた意見を全て挙げるよう試みたが、ほぼ同類と考えられる複数の意見がある場合、それらの中で代表的なものを一つ採り上げた。

##### ①砂浜美術館やそのコンセプトに対する認識

この中で、まず、大方の自然—砂浜と松原に対する意識を述べた意見としては、「町民にとって当たり前の場所である」、「町の自慢でもある」というものがあつた。また、砂浜美術館は「砂浜や松原を生かすものとしてつくられた」という理解もあつた。これは、砂浜美術館のはじまりについての意見であるともいえる。

砂浜美術館活動に対する認識については、「発想や活動は高く評価している」、「松原や砂浜あつての砂浜美術館である」、「町外へのPRであるとともに町民意識を高めるものでもある」というものがあつた。そして、砂浜美術館の今後については、「町の開発・活性化の為には、砂浜と松原とを中

<sup>31)</sup> 参考文献の [1] p.92と参考資料 [1] を参照。

心にした町づくりをすべきであり、砂浜美術館は砂浜や松原を利用したイベントを行っていくべきである」という話が聞かれた。

これらの意見から、砂浜美術館には大方町自慢の美しい砂浜と松原が不可欠と考えられており、町の自然を生かした砂浜美術館の活動は、町の宣伝にもなり、町民意識を高めることにもつながっていると考えられていることがうかがえる。

## ②砂浜美術館と住民とのつながり

次に、砂浜美術館と各人とのつながりに対する意見を挙げる。

まず、イベントに作品を出品するなどの砂浜美術館活動への参加については、「自分はあまり参加していない」、「自分の周りの人が参加しているという話もあまり聞かない」というようなものがあった。また、「役場職員や砂美人連が運営主体である」、「ボランティアでの町民参加という話はあまり聞かない」、「町職員中心のままでやっていけるか心配、後継者を何とかしたい」、「ボランティアや民間の協力をもっと得て、住民参加型になれば長続きするのではないか」といったような声も聞かれ、活動は役場職員が中心であると理解しているものが目立った。

一方、個人ではなく、漁協・松原保存会といったような団体の視点からのつながりについての意見としては、「今まで協力をしてきた」、「砂浜美術館からの恩恵は特にない」というものがあった。

このように、砂浜美術館活動は住民参加型のイベントになればよいと思われているようである。しかし、その一方で、協力体制について積極的な意見は聞けなかった。町民がどのような役割を担えるのかが明確ではないのかもしれない。

## ③運営資金と砂浜美術館に関わる青年層

予算や寄付の使用による運営については、概ね次の3つの意見にまとめられるようである。それらを具体的に見てみると、(1)「予算に関して特に考えていない」、「予算のことは町の人には知らないだろう」というように関心の薄さがうかがえる意見や、(2)「Tシャツアート展を行うことにどんな意味があるのかわからない。お金がかかるだけではないか」、「他の公共（事業：筆者）のためにお金を使ったほうが良い」、「浜のイベントは海岸の人だけが恩恵を受け、山の人には寄付だけ取られる」というような厳しい意見、(3)「多額のお金を使っているが、取り組む姿勢を大事にすべき」、「お金がかかるからやめてしまえというのでは消極的すぎる」という前向きな意見があった。

また、砂浜美術館に関わる若者に対しては、「青年層が町の活性化を目指している」、「お金はかかるが若い人のエネルギーのはけ口になっている」、「一般的には若い人が一生懸命やっているので歓迎している」、「若い人が夢を持てればよいのだが」という声が聞かれた。

これらを概観すると、厳しい意見もあるが、お金はかかっても若い人たちの努力や活動自体は高く評価されていると考えられる。但し、「青年層が頑張っているイベント」という見方が強いようであり、あまり身近に感じられていない部分があるのかもしれない。

## ④その他の意見

最後に、①～③に含まれなかった意見を挙げる。

まず、砂浜美術館そのものに対する関心については、「大した関心は持っていない」、「砂浜美術館に対する意見は特にない」、「砂浜美術館活動は良いとは思わない」というものがあった。

その中で、具体的に砂浜美術館のイベントである「Tシャツアート展」と「シーサイドギャラリー・夏」における花火大会に対する意見を聞いたところ、Tシャツアート展に対しては「メディアのとりあげによって有名になった」、「町外への宣伝効果に役立っている」、「どこに価値があるのかわか

りにくい」というものがあった。一方、花火に対しては「花火だけは町民にも人気がある」ということであった。

基本的に砂浜美術館に大きな関心はないように見受けられるが、Tシャツアート展と花火大会は、砂浜美術館について触れる時によく引き合いに出されていた。現在の砂浜美術館活動において、Tシャツアート展は町外向けのイベントとして、花火は町民に親しまれるイベントとして認知されているようである。

以上が聞き取り調査から得られた町民意識のまとめである。

### 3 町民アンケートから得られた町民の意識

次に、町民アンケートの結果について見てみよう。アンケート回答者は、大方町が無作為に選んだ町内在住者180名である。回答者の年齢層を図3-1に示した。先に述べた聞き取り調査の結果は、主に50代以降の方々の意見によるものであるが、このアンケート結果をあわせ見ることで、町民全体の意識の把握を試みたい。

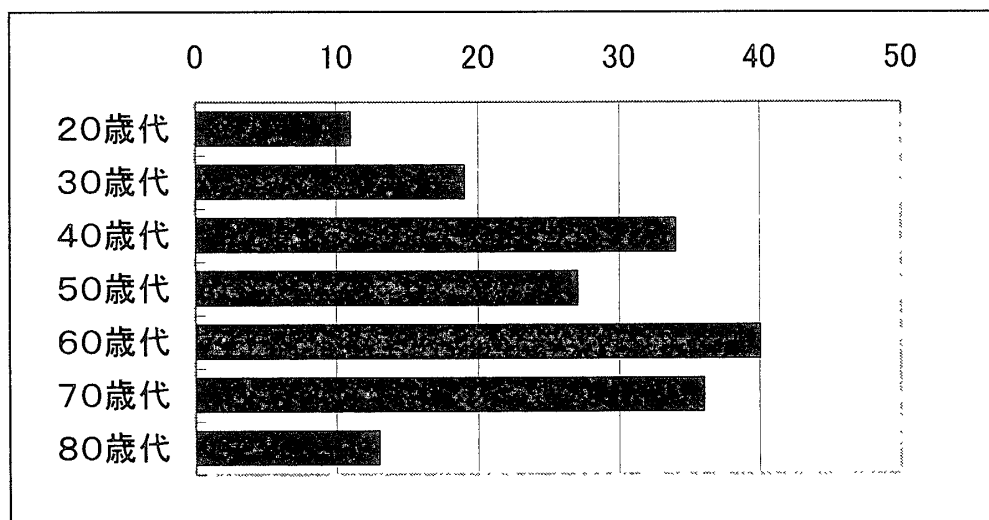


図3-1 回答者の年齢層

注) 大方町企画管理課「町民アンケート」より作成

本節では、大方町が1997年12月に行ったアンケート結果の資料をもとに、3つの点について考えた。1つ目に、砂浜美術館の取り組みは、どのように評価されているのか。イメージアップ・活性化・産業振興・教育の4つの視点から、砂浜美術館の取り組みの評価(①)について考えた。2つ目に、町の活性化の効果という点で、世代によって砂浜美術館の評価に違いは見られるのか。砂浜美術館の町の活性化効果の評価(②)を年齢別に見た。3つ目に、美しい自然を売り込んでいる砂浜美術館であるが、自然保護活動に対する町民の評価とはどう関係しているのか。松原保存活動の評価を引き合いに出し、砂浜美術館の町の活性化効果の評価と松原保存の評価(③)との比較を試みた。

#### ①砂浜美術館の取り組みの評価

砂浜美術館の取り組みの効果を図3-2に示した。

このアンケート結果を見ると、砂浜美術館は、イメージアップにはつながったと思われるようである。聞き取り調査で、「町外への町の宣伝になっている」という意見が多かったのと通ずるの

ではないかと考えられる。一方、産業振興にはあまりつながっていないと感じている人が多いようである。聞き取り調査でも砂浜美術館と産業振興との関連について積極的な意見はなかった。

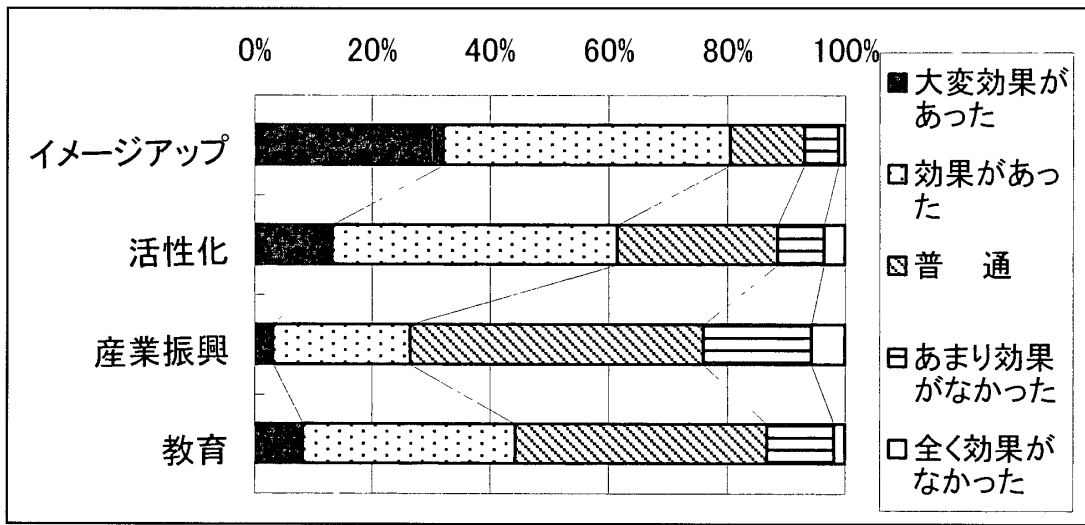


図3-2 砂浜美術館の取り組みの効果

注) 大方町企画管理課「町民アンケート」より作成

②砂浜美術館の町の活性化効果の評価（年齢別）

砂浜美術館の町の活性化の評価を年齢別に表したものが図3-3である。

ここで注目して頂きたいのが、30代の評価である。大いに効果があると答えた割合が他の年代よりもはるかに多く、砂浜美術館の取り組みが町の活性化に大変効果があると感じている人が多いようである。この高い評価とは対照的に、50代では大いに効果があると答えている人が全くいない。この世代は、先程の聞き取り調査に協力してくださった方々の世代と重なる。聞き取り調査で「砂浜美術館は若い青年層のイベント」であるとか「特に関心がない」という意見が多かったが、この評価はそういったイメージと関係するのかもしれない。

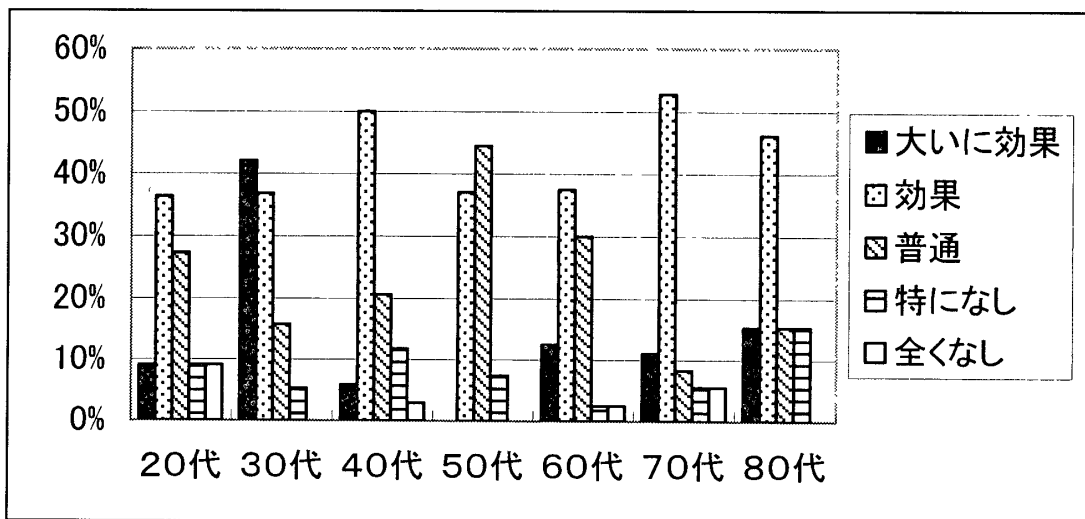


図3-3 砂浜美術館の町の活性化効果（年齢別）

注) 大方町企画管理課「町民アンケート」より作成

③砂浜美術館の町の活性化効果の評価と松原保存の評価との比較

松原保存活動に対してある評価をしている人が砂浜美術館に対してはどう評価しているのかを図3-4に、またその逆を図3-5に示した。

まず、図3-4に示した結果について考えてみよう。ここで興味深いのは、松原保存が町の活性化に大いに効果があると答えている人は、砂浜美術館も大いに効果的、または効果的であると答えている点である。しかし、砂浜美術館の評価から松原保存の評価を図3-5で見ると、砂浜美術館が町の活性化に大いに効果があると感じている人は、松原保存が大いに効果的であると評価している人が砂浜美術館も効果的であると評価しているほどは、松原保存を効果的であると感じていないようである。

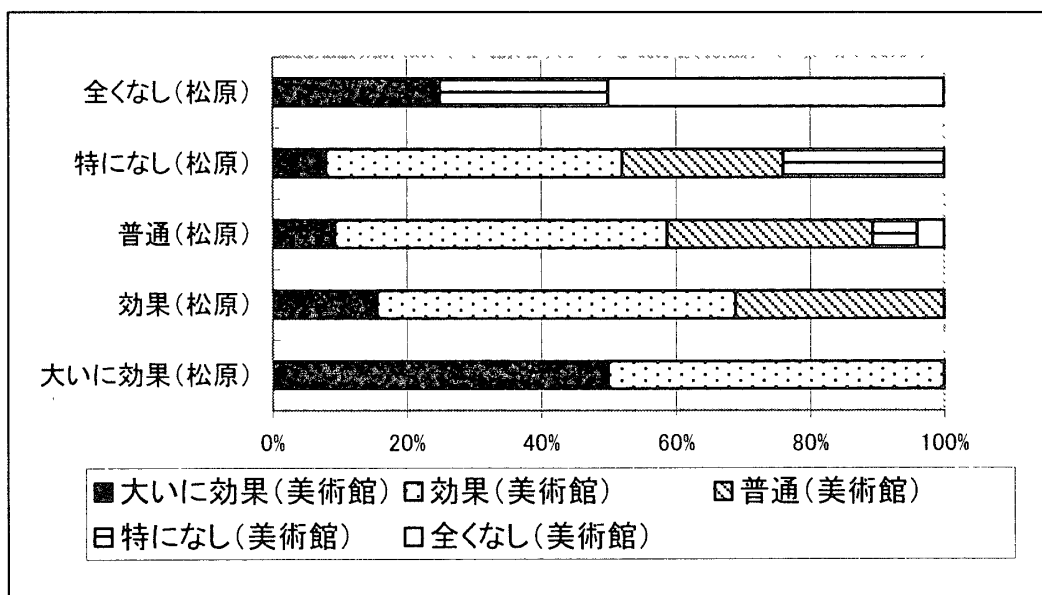


図3-4 松原保存の活性化効果の評価からみた砂浜美術館の評価  
注) 大方町企画管理課「町民アンケート」より作成

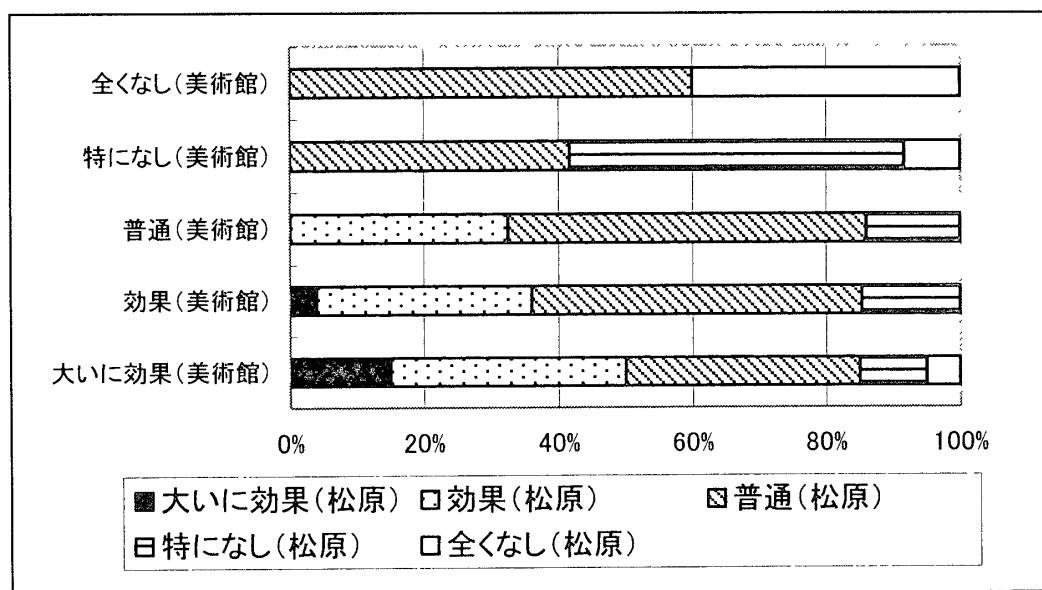


図3-5 砂浜美術館の活性化効果の評価からみた松原保存の評価  
注) 大方町企画管理課「町民アンケート」より作成



大方町の美しい自然があってこそ成り立っている砂浜美術館であるが、その評価が松原保存の評価と重ならないのはなぜだろうか。「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」というコンセプトが、町民によく理解されていない可能性が考えられる。

以上が町民アンケートの分析結果である。

#### 4 町民意識の構造—聞き取り調査と町民アンケートの結果から

町民の意識について聞き取り調査と町民アンケートの結果をもとにまとめた。

まず、砂浜美術館には美しい砂浜と松原が不可欠であると考えられているようであるが、「美しい砂浜が美術館です」という言葉に込められたものの見方や考え方など、コンセプトの意味まで理解されているかという疑問が残る。また、住民参加のイベントになれば良いと考えられているようであるが、町民が参加できるような体制が整っているかという点も疑問が残る。砂浜美術館のコンセプトをもっと町民の間に浸透させるには、また、町民が参加できるような体制を整えて、砂浜美術館がより身近なものに感じられるようにするにはどうしたらよいのだろうか。今後も町の振興に貢献するには、町の自慢である松原と砂浜を守っていく姿勢は維持すべきであろう。砂浜美術館が中心となって、自然保護などを呼びかけ、松原保存会など各界や町民の役割を打ち出すのも一つの方法かもしれない。

また、多額のお金がかかっているという点で批判はあるものの、若者が頑張っている面は評価されているようである。しかし、「若者（青年層）のイベントである」という認識が強いようで、町民全体のものとして見られていない可能性がある。砂浜美術館自体に特別な関心が注がれておらず、アンケート調査でも特に50代の評価は低かった。Tシャツアート展は町外への町の宣伝に役立っており、花火は町民にも人気があると感じられているが、Tシャツアート展は町民には価値がわかりにくいようである。青年層だけでなく特に年配の人たちにも、「自分たちの砂浜美術館」と意識してもらえて、町民全体の砂浜美術館にするにはどうしたらよいのだろうか。砂浜美術館の考え方は評価されているようだが、その活動内容は町の人にはどこかとおつきにくいと感じられている部分があるのではないだろうか。砂浜美術館を町民の昔からの生活レベルにあった形で見直してみるのもよいかもしれない。また、イベントも、花火大会のように町民全体に親しまれるものに重点をおくのも一つの方法であろう。

聞き取り調査と町民アンケートの結果をもとに、全体的なまとめをここで行ったが、砂浜美術館を巡る町民意識の構造がこれで明らかになったとは言い切れない。聞き取り調査では、その対象者が全員男性であったため、意見に偏りが生じている可能性がある。また、町民アンケートは1997年に実施されたものであり、現在の町民の意識とは一致しない部分があるかもしれない。しかし、これまで地元の方の意識を中心に書いた論考はなかったので、砂浜美術館の今後を改めて考え直すきっかけとして、今回の作業は無駄ではなかったように思われる。

砂浜美術館の今後に関してもいくつか提案をしたが、実際に今後何らかの行動を起こすには、多くの問題が残されている。次節では、その一つとして砂浜美術館の理想と利益の追求について考えた。

#### 5 砂浜美術館の今後に関する一考察

そもそも砂浜美術館は何を目指していたのだろうか。砂浜美術館ノートによると、砂浜美術館を通して「伝えたいのは考え方」であるとのことである<sup>35</sup>。そこには、安易に町民に人気のあるイベン

<sup>35</sup> この点については、参考文献 [2] pp.40-43を参照。

トを増やせば良いわけではないという問題や、そのような理想だけで収入が得られて生活が成り立つわけではないという現実との板ばさみが存在する。

聞き取り調査終了後の関係者の方のお話では、やはり、究極の目的は「考え方を伝えたい」・「精神的豊かさを求めたい」というものであった。また、そのためには、利益を生み出せる生産体制を整えることが必要であるとのことであった。利益を求めて行動を起こす過程で、砂浜美術館の考え方が浸透していく可能性は十分にあるだろう。

今まで砂浜美術館の今後についていくつか提案をさせて頂いたが、やはり利益を求めて協力体制をつくるのが先決であると考えられる。体制を整える上で様々な問題が存在することは言うまでもない。しかし、町民が何らかの役割を持ち、実際に活動に参加して手ごたえを得ないことには、砂浜美術館の持つ意味を実感することはできないのではないだろうか。

「砂浜美術館についてどう思いますか」と漠然と尋ねたとき、町民の一人一人はどのようなものを思い浮かべるのだろうか。聞き取り調査でこの質問を投げかけたとき、「うーん」とやや悩んでから話し始める方が多かった。しばらく考えてから出た話の多くは、Tシャツアート展や花火大会などのイベントに関するもので、砂浜美術館のコンセプトに関して多くは話されなかった。町民にとって砂浜美術館は、実体が掴みづらくイメージのはっきりしないものなのかもしれない。もしそうであるならば、砂浜美術館をもっと具体的な何かとして感じてもらう必要がある。ある複数の人々が、具体的に同じイメージや気持ちを共有できたとき、初めてそれが浸透したコンセプトになったと言えるのではないだろうか。

コンセプトの共有を促してくれる具体的なものにはどのようなものがあるのか。「美しい砂浜が美術館です」などのものの見方を表現した哲学的な言葉だけでは、砂浜美術館は敷居が高いものとして受け止められてしまう。大方の美しい自然は確かに素晴らしいが、町民にとってはあまりにも見慣れた風景でしかない。つまり、概念的な言葉や見慣れた自然だけでは、コンセプトの共有は実行が困難であることが今回の調査でわかった。

では、これからは利益を求める過程で生じる困難や喜びを共有し合うことで、砂浜美術館のコンセプトの共有を目指しても良いのではないだろうか。町民も活動に参加し砂浜美術館と具体的に関わり、困難や喜びを体験することで、砂浜美術館に対するイメージがはっきりしてくるかもしれない。最初はそのイメージが一人一人違っていても、まずはイメージをはっきりさせ、関心を向けさせることが不可欠である。活動を続けていくうちに、やがてイメージに共通性が生まれ、コンセプトが浸透していくかもしれない。町民との関係づくりの一手段として、ひとまず利益追求という目標を仲介役に置いて、町民と一緒に汗を流す努力を始めてはみてはどうだろうか。

(田中 瞳)

## 引用文献

- [1] 高知県大方町 (1999) 『大方町総合振興計画』 大方町役場企画管理課
- [2] 砂浜美術館 (1997) 『砂浜美術館 BOOKS 1 砂浜美術館ノート 砂浜美術館の記録 1989-1996』 砂浜美術館

## 参考資料

- [1] 大方町企画管理課「町民アンケート」

## 第4章 砂浜美術館活動の新たな可能性

### 1 はじめに

本稿の課題は、既存の文化圏に何らかのインパクトが与えられ、そこから創出された新たな文化が直面する問題を高知県幡多郡大方町の砂浜美術館活動の事例をもとに明らかにし、その文化が地域文化として定着するために有効な手段を検討することにある。

砂浜美術館活動は、大方町の既存の文化圏にコンセプトによる“発想の転換”という刺激を与えることで、町内へ既存の生活空間を見直し、そのよさを発掘、認識させる機会を提供してきた。組織は、『砂浜美術館ノート』（以下、『ノート』）[10]に「砂浜美術館の運営は、基本的には実行委員会形式をとっています、実行委員会は広くオープンに開かれており、そのときどきに集まった有志で構成されます」とあるように、役場職員・民間出身・町外からの移住者などあらゆる立場の人々によって運営されている任意団体である<sup>36</sup>。このように、役場直属ではなく、そこから一步距離を置いた組織形態をとっていることで、比較的自由に町外と交流し、大方町の魅力をアピールするというサービスを執り行ってきた。

しかし、その発足から10年以上を経過した現在まで、砂浜美術館は常に内と外との緊張関係を維持しながら均衡状態を保ってきたことが、『ノート』や砂浜美術館スタッフである松本敏郎氏の論考などによって明らかになっている<sup>37</sup>。

本稿では、砂浜美術館活動の担い手の意識構造を整理したうえで、そこから考えうる活動の今後の展開に対する一方向性を提示したい。以下、第2節では砂浜美術館活動の担い手の意識を整理するとともに、活動を取り巻く現況から見出せる課題を抽出する。そして、第3節では「エコロジカル・デザイン」の考え方を砂浜美術館活動に取り入れることを提案し、第4節で結論を述べる。

### 2 砂浜美術館活動の現況とその課題

#### 2-1 活動の背景にあるスタッフの意識

筆者らが行ったヒアリング調査（2002年9月現在まで）によると、かつての入野周辺は町民生活にかなり密着した場所であり、同時に松原保存の意識も維持されるという、自然とのバランスの保たれた空間であったが、高度経済成長に伴う人々の生活スタイルの変化や県の土佐西南大規模公園指定などの影響から、入野松原や砂浜と人との接点が次第に失われていった、ということがわかっている。ところが、外部からコンセプトというインパクトが与えられることで、大方町民有志は「長さ4キロメートルの砂浜を頭の中で美術館にしてしまった」のである<sup>38</sup>。これが、いわゆる「砂浜美術館構想」であり、このインパクトは第2章では「人が集まる場としての機能を失った入野松原を、活動の場として再生させようとしたもの」であると位置づけられた。

現在、この考え方は大方町のまちづくりの基本理念に据えられている<sup>39</sup>。また、広報や町内の至る

<sup>36</sup> 砂浜美術館 [10] p.53「砂浜美術館の運営について」から引用。

<sup>37</sup> 砂浜美術館 [10]、松本 [17] を参照。これらは砂浜美術館内部の様子を関係者の目から捉えている。尚、これらを踏まえ、筆者らが行ったヒアリング調査結果をまとめた報告書第2章の拙稿 [13]「砂浜美術館活動の担い手と意識の展開」でもその緊張関係を客観的視点から整理している。

<sup>38</sup> 大方町史改訂編纂委員会 [2] p.472。

<sup>39</sup> 『大方町総合振興計画』では、まちづくりの基本理念として「自然、人、そして、時」を掲げ、この基本理念を具体化するための一手段として「砂浜美術館」を挙げている（[4] pp.8-9）。また、p.9には、その取り組みが一過性のイベントではないことを明記していることから、少なくともこの振興計画上では、砂浜美術館活動は大方町民に強く意識されるべき存在であったということが指摘できる。

所で砂浜美術館のロゴマークを目にすることができる。これらの状況は、砂浜美術館活動がいまや大方町にとって不可欠な要素の一つと認められるべき存在にあることを示している。しかし、ひとたびその現状に目を向けると、活動は、町外での評価は比較的高い一方で町内では芳しい評価が得られていないようであり、活動によって創出された文化は地元根づいているとは言い難い状況が見出された<sup>40</sup>。そして、その背後には活動の担い手と町民との間にある活動に対する意識のズレの存在を指摘できる。

実際に活動に携わるスタッフもこの現状は十分に把握しているようである。しかし、砂浜美術館は任意団体であって、活動は殆どがボランティアによって行われている。それに自らの時間を割いてまで集結するスタッフの中には、活動を展開するにあたって各々の意識の中に強い信念が存在することはいうまでもない。よって、現状への対処法にも各人考え方が異なっているようであり、それが方向性の統一を阻んでいるきらいがある。また、その強い信念の背景には各々の持つバックグラウンドの違いが少なからず反映されているようであるということもわかってきた<sup>41</sup>。

今回の調査では、数名の砂浜美術館運営スタッフへのヒアリングを行い、その結果から、彼らの意識は大きく次の3つの立場に整理できた<sup>42</sup>。それは、図4-1に示したように、「文化の創造の意識」、「地域振興の意識」、そして「コンセプト理解の意識」である。「コンセプト理解の意識」の中にはその対象として、地域内（以下、域内）と地域外（以下、域外）の2つの極が見出せる。

これら3つの意識は、現在活動に参加しているスタッフにとって、砂浜美術館活動を運営する上でどれも常に意識レベルにとどめているものであり、

必ずしも各人が自らの立場にもとづいた意識（考え方）に固執しているわけではない。だが、各々の立場から活動の方向性を考えた場合、現在、「文化の創造」と「コンセプト理解」との重なる部分からは、地域文化活動に徹するという道筋が、一方で、「文化の創造」と「地域振興」との重なる部分からは、地域マーケティング活動への道筋が見えてきているようである。地域文化活動は砂浜美術館の文化面を、地域マーケティング活動は経済面を、それぞれに支えてきたといえる。だが、「地域振興」と「コンセプト理解」との間には現時点では連関の形跡は見られない。この3者において連関関係が成立し、内部で循環が生じたとき、新たに創出された文化は地域文化として根づき共有化されたといえることができる。よって、現在、その障壁となっていると思われるのが、第3章で指摘された町民の意識の中でのコンセプト浸透度の低さであるといえる。

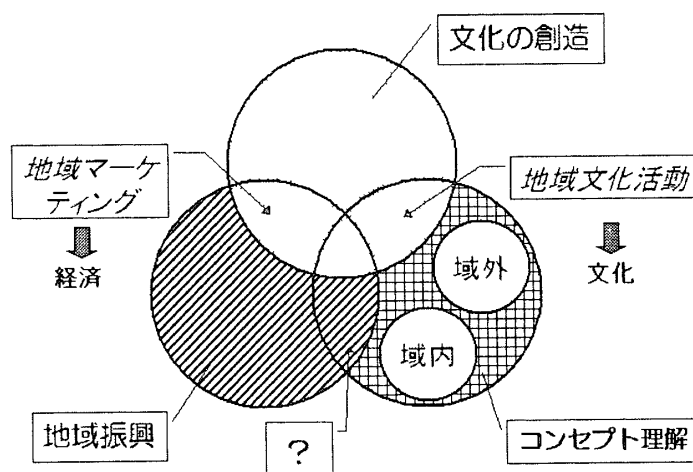


図4-1 活動の背景にあるスタッフの意識

<sup>40</sup> 大方町民の意識構造については第3章に詳しい。

<sup>41</sup> 拙稿 [13] pp. 15-22を参照。

<sup>42</sup> 今回の調査ではインフォーマント数が限られていたこともあり、本稿では“3分類”としたが、今後さらにヒアリングを重ねた場合、また新たな立場が見出せる可能性がないわけではない。これは今後の課題となるだろう。

### 2-2 活動の理想的な流れ

次に、砂浜美術館活動の「理想的な流れ」を上述した3者関係をもとに考えてみたい。（図4-2を参照。）

まずは、砂浜美術館活動によって、大方町内に新しい文化が創造されることで、域内（町内）の人々にコンセプトが浸透する。同時に、創造された文化を発信することによって域外の人にもコンセプトが浸透する。これは、ヒアリングの際にスタッフから聞かれた「コンセプトが浸透することで全ての人々の心がゆたかになればよい」という考え方にもとづく流れである。また、

一方では、新たな文化が創出されることで、その魅力を具現化した新たな産業が生まれ、地域が経済的にも発展する。そして、そこから域内の人々が砂浜美術館のコンセプトに目を向ける、という流れも考えられる。いわば、地域産業振興を介した心の充実である。これら2つの流れが活発化すると、必然的に域内住民のアイデンティティや自己実現の意識が向上し、その意識は外向けにも表明される。そして、域外の人々にも認められる（面白いと認知される）と、両者の間で様々な「交流」関係が生まれる。このようなシナリオが活動の理想的なあり方として描ける。

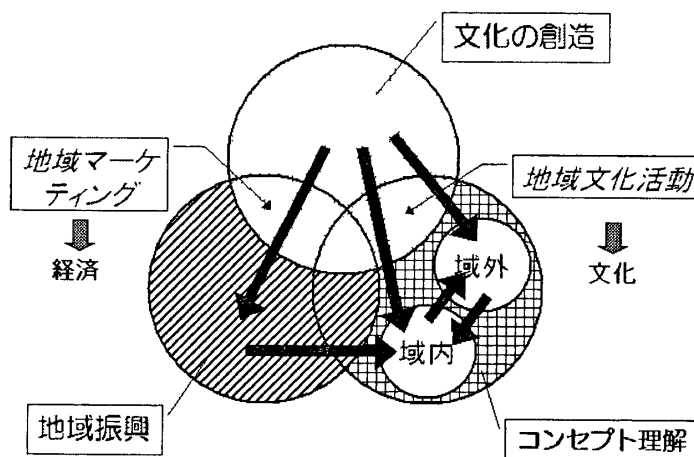


図4-2 活動の理想的な流れ

### 2-3 現在の活動の方向性

では、実際には、先の理想像はどの程度達成されているのだろうか。それを確認するために、活動の現況をヒアリング結果をもとに整理してみる。（図4-3を参照。）

砂浜美術館活動にはその活動の前提に「伝えたいのは考え方」という方針がある。ゆえに、最終的には目下の課題となっている「概念理解」が到達すべき目標となる。よって、現在、スタッフの間では活動の方向性としては「概念理解」に向けて2つの道筋が意識されているようである。まず、一方は「文化の創造」の意識から域内・域外の人々が「概念理解」へ向かうという道筋である。他方、「文化の創造」から「地域振興」を経て「概念理解」へ向かうという道筋も発足当初から度々議論の俎上に上っている。本来、この両方の流れがうまく機能し、3者内で循環するのがベストであることはいうまでもない。だが、現在の活動の方向性を客観視すると、活動が発足以来「日本イベント大賞 優秀賞」など数々の受賞経験があり、最近では日本ファッション協会の「日本生活文化大賞 生活文化賞」を受賞した、というよう

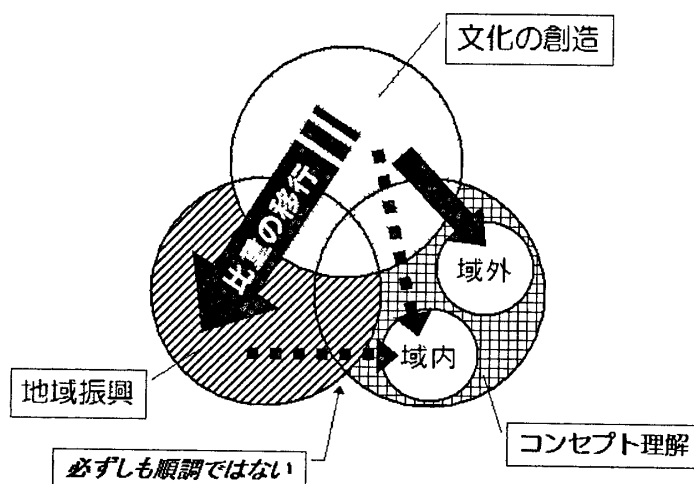


図4-3 現在の活動の方向性

に各種メディアで取り上げられ、外部からの注目度が高いことから、域外への発信・伝播の傾向が目立つ<sup>43</sup>。それを受けて、域外へのコンセプトは概ね浸透の動きがある。一方で、何度も指摘されたように町内への浸透は十分でないといえ、図の域外向けの黒矢印のようにその比重は町外にかなりウェートがおかれているといえる。

また、ヒアリングでは「今後は儲けることに重点を置く」という話も聞かれた。事実、2001年より砂浜美術館はTシャツアート展入賞作品をプリントしたTシャツの販売を開始している。この動き以外にもミュージアムグッズの充実や活動とタイアップした地場産品の商品化を模索している様子が窺えた。このことから、現在、文化の創造から地域振興へという道筋に比重がかなり移行していることが指摘できる。だが、そこからコンセプト理解へという流れについては必ずしも順調ではないようである。

このように、活動内部の意識構造を整理した場合にも第2・3章で指摘された課題と同様のものが抽出された。つまり、先に挙げた理想像と活動の現況との比較から、活動の存続と展開を占う上で、域内へコンセプトを如何にして浸透させるかが重要なポイントとなるということが出来る。

### 3 砂浜美術館活動の意義と可能性

#### 3-1 活動の原点への再照射

砂浜美術館活動の面白さは、そのコンセプト（考え方）にある。コンセプトに裏打ちされた活動は、1992年の高知新聞社説においては、第2次文化ブームの煽りを受けた美術館・博物館などの箱物づくりに対する「健康的なパロディー」であるとも評価された<sup>44</sup>。「考え方を変えると見えるものがある」とするコンセプトは、前節でも触れたように当初から域外への浸透度はかなり高い。その理由はいうまでもなくコンセプトが持つ普遍性にあるといえ、この高い評価は創出された新たな文化の特性を体現している<sup>45</sup>。だが、一方で域内には十分に浸透していない。以下、この理由を活動の原点に遡って考えてみる。

そもそも、砂浜美術館活動の根源には、『町史』にも見られるように「自分の住んでいるまちが見えない」という問題意識があった<sup>46</sup>。その意識に中川が『ノート』で指摘している「個々の意識にバラバラにあった砂浜を意識の上で共有化」する仕掛けであるコンセプトがマッチしたのである<sup>47</sup>。しかし、意識の共有化以前に、その根元にある問題意識が多勢のものでなければ、創出された文化は地域全体のものとはなりえず、住民は文化の享受者とはなりえない<sup>48</sup>。山崎 [19] は第1次文化ブームから第2次文化ブームまでの約15年間の中に、「作り手のための文化」から「自分たちのまちづくりのための文化」へというような文化の質の変容を見出した<sup>49</sup>。この変容を砂浜美術館活動に照ら

<sup>43</sup> これまでの受賞経験は松本 [18] を参照。また、「日本生活文化大賞 生活文化賞」受賞のニュースは記憶に新しい（高知新聞 [7]）。

<sup>44</sup> 高知新聞 [6] を参照。

<sup>45</sup> 梅棹忠夫・下河辺淳・佐野善之は、「すべてを生み出す母なる地域 地域と文化を語る」（山崎 [19] 所収，pp. 215 - 234）において、地域文化は普遍的なものでなければならないといっている（pp. 218 - 222）。

<sup>46</sup> 大方町史改訂編集委員会 [2] pp. 472 - 479。

<sup>47</sup> 砂浜美術館 [10] p. 48。

<sup>48</sup> 池上 [1] は、文化経済学的視点から、文化（本文では「芸術文化」）の創造や享受の機会は①クリエイターと②享受者（「啓発された民衆」）、③資金提供者（「人類愛から資金を提供する個人や集団」）、④文化マネージャー（「文化の光を輝かせる空間を演出する人」）が存在し、はじめて成立すると指摘する。（p. 70）

<sup>49</sup> 山崎 [19] p. 15。「かつてのつらい環境の中で、固い閉じられた組織をつくり、その中でようやく文化を支えるという状況から、むしろ、自分たちの住む町や村を文化的に改造し、組織の外の人間を積極的に招き入れ、柔らかなネットワークをつくらうという動きが、大きなうねりを見せはじめたのです。」

し合わせると、第2次文化ブームによって大方町民がまちづくりのための文化を創造する意欲を高めたことに変わりはないだろう。だが、地域の一般住民とスタッフとの間には少なからずその意識に温度差があったことが考えられる。つまり、山崎の指摘した地域文化の質の変容の「つくり手のための文化」から「自分たちのまちづくりのための文化」へのステップ段階で、文化の創造のスタート地点における域内の各人の意識レベルに違いが生じているため、ある者はコンセプトによるインパクトによって自己啓発からまちづくりへと意識変化を急速に成し遂げたが、一方である者はその必要性すら感じなかったということが起こりえたと考えられる。よって、大方町全体で見たならば、活動は完全な文化として根づいていないといえることができる。

### 3-2 活動の可視化の必要性

では、スタート地点に立ち返って、域内の住民を砂浜美術館活動という創出された文化の享受者とするためにはどうすべきか。

砂浜美術館という「考え方」を理解する手続きとして、現状のイベント等の活動では十分でなく「わかりやすさ」が求められているということは常にスタッフも感じているようである<sup>50</sup>。そして、現在、先の理想像で挙げた流れのうち地域振興からコンセプト理解へとという道筋に対して偏重の動きがある。これは、「儲ける」ことで活動を可視化させるという視座に立つ考え方である。しかし、活動の原点が「まちづくり」であったことに立ち戻ると、現行とは逆の道筋、地域文化活動からコンセプト理解を通して地域振興に向かう道筋が困難に見えて意外と有効であるかもしれない。つまり、コンセプト理解の障壁を、第2章でも話題となった地域住民の日常生活へのアプローチで乗り越えることを考える。「日常生活」はそこに住むものにとって最も「わかりやすい」形である。その生活と砂浜美術館活動が一致できる点を模索するのである。

現在まで、コンセプトは第2次文化ブーム以降の箱物建設ラッシュへのパロディーやアンチテーゼ的な意味合いで理解され、活動もソフト路線を維持してきた。この路線はイベント以外では「環境への取り組み」という形で可視化されてきた<sup>51</sup>。しかし、それだけでは十分な働きかけにはならなかった。

一方、「まち」自体は時代の流れとともに変化し、それに伴って生活基盤整備も徐々に進みつつある。例えば、県の土佐西南大規模公園指定における園路の開通や、町の区画整理事業がその例として挙げられる。大方町は2002年7月に「都市計画マスタープラン」(以下、マスタープラン)[5]を策定した。その中では、都市づくりの主要課題として次の4つを挙げている。「(1)産業振興及び交流基盤の形成の方向(動

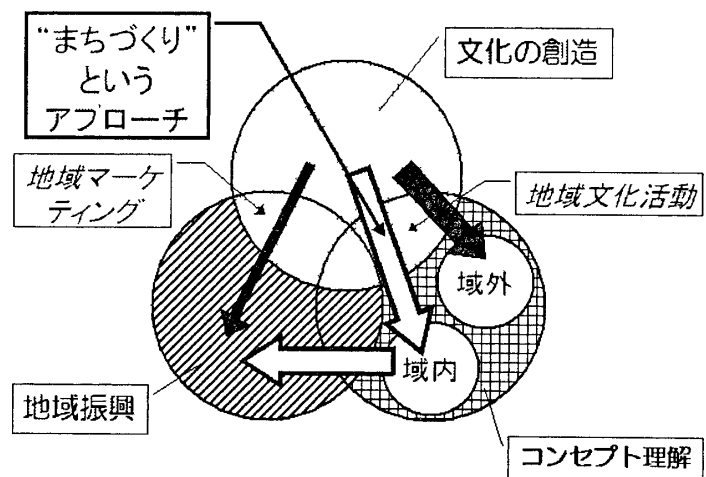


図4-4 まちづくりというアプローチによる流れ

<sup>50</sup>「わかりやすさ」の問題は『ノート』の時点で既にスタッフにとっての懸案事項となっている。([10] p.42)

<sup>51</sup>例えば、活動の中に「エコツーリズム(エコツアー)」を含めていることもその現れである。砂浜美術館は1998年には大方町エコツーリズム・ガイド『ほっちほっち』(財団法人自然環境研究センター発行)の編纂にも関わっている。また、2002年3月には「はた・エコツーリズムセミナー」を砂浜美術館主催で開催している。

き、活力)；活力と交流を育むまちづくり，(2)自然との共生，都市景観形成の方向(質)；山，川，海が息づくまちづくり，(3)公共公益施設の整備の方向(基盤)；安全で，心地良い暮らしを育むまちづくり，(4)施策推進の基本的な手法(実現システム)；住民と行政の協働によるまちづくり」である<sup>52</sup>。このマスタープランにおける「まちづくり」計画の(2)・(4)に砂浜美術館活動が関わる余地があると考えられる。スタッフも『ノート』で「(建物を：筆者)『つくらない』ともいっていません」と述べているように，活動はハード路線を真っ向から否定するものではない。そこにアプローチの余地が見出せるのである<sup>53</sup>。(図4-4を参照。)

昨今，ハード建設にも様々な動きがある。バブル期の建設ラッシュを代表するような画一的な規格に沿った建物が林立するモノカルチャーの建築から，環境共生を意識したデザインの建築が主流になってきた。その中でも，近年「Ecological Design」(以下，エコロジカル・デザイン)という考え方を体現した建築が注目されつつある<sup>54</sup>。エコロジカル・デザインの提唱者の一人であるシム・ヴァンダーリン[9]は，従来型の環境に配慮しない資源浪費型のデザインのことを「dumb design (ダムデザイン)」と呼び，エコロジカル・デザインをそれに対置するものと位置づけた。そして，それは自然と文化をつなぐ確固とした一つの方法であるとする。このエコロジカル・デザインの考え方は，活動の根底で常に「環境」を意識しつつも，その具体化の方法としては先に挙げたエコツアーなどのソフト路線のみにとどまっている砂浜美術館活動において，その考え方をまちづくり(ハード路線)に活かすというように，活動の方向性の選択の幅を広げることにつながると考えられる。

そこで，以下ではエコロジカル・デザインの砂浜美術館活動への適用の可能性を検討してみたい。

### 3-3 可視化の道具としてのエコロジカル・デザイン

エコロジカル・デザインは「自然のプロセスと統合することによって，環境への破壊的影響を最小化するすべてのデザイン形態」と定義づけられる。シム他[9]によると，そのルーツは19世紀にまで遡り，文化経済学の始祖にも数えられ“生活の芸術化”を謳った William Morris や，都市論において文化的貯蔵，伝播と交流，創造的付加の機能を重視した Lewis Mumford らに求められるという。

また，エコロジカル・デザインは居住空間のみならず，日常生活の細部までその領域に含む。例えば，「永続可能な農業と倫理的な土地利用の基盤」をもつての持続可能な生活実践を主張した Bill Mollison の「パーマカルチャー」の流れも汲んでいる<sup>55</sup>。

つまり，エコロジカル・デザインは「特定の職業的デザインに縛られない，自然との契約・協力の1つの形」であり，「ランドスケープ，建築物，都市，そして，エネルギー，水，食物，製造，廃棄に関するシステムを再設計するための一貫した枠組を提供する」ものである<sup>56</sup>。その実践は一家庭における堆肥トイレから，スウェーデン・イエルナの「エコビレッジ」やスイス・ドルナツハの「ゲーテアヌム」周辺地域のデザイン，或いはカリフォルニアの海岸線のエコトーン(Ecotone；生態系の移行帯)のデザインといったランドスケープ(景観)のデザインまで含まれ，極めて多様で広汎である<sup>57</sup>。

このエコロジカル・デザインの1つの手法に「Visual Ecology (見せるための美学)」ということ

<sup>52</sup> 高知県大方町 [5] を参照。

<sup>53</sup> 砂浜美術館 [10] p.37.

<sup>54</sup> 「エコロジカル・デザイン」の考え方についてはシム他 [9] を参照。

<sup>55</sup> 「パーマカルチャー」についてはビル・モリソン他 [16] を参照。

<sup>56</sup> シム他 [9] pp.38-39.

<sup>57</sup> 世界各地のエコロジカル・デザインの実践については，ビジュアルで理解するのが有効である。(本稿では，エコロジカル・デザイン専門誌『BIO-City』[14][15]を参照した。)



がある。それは「●私たちが土地を重ね合わせた抽象概念を見て、より深くそれを意識するのに役立つ、●複雑な自然のプロセスを視覚化し理解可能なものにする、●視角から隠されたままのシステムやプロセスを見えるようにする、●認識されていない自然とのつながりを強調する」ということを目指したデザインである<sup>58</sup>。例えば、カリフォルニアの海岸線のデザインは、近自然工法に Visual Ecology の要素を付加したものであるといえる。

例えば、海岸線は生態系の変わり目であることからエコトーンに含まれる。エコトーンでは2つ以上の自然環境が交わるため、多様な生態系構造が創出される。また、自然景観と生態系の関係を研究対象とする景相生態学では、海岸は、大地と海洋の「エネルギーのぶつかり合いの場であり、常に形状を変えながらも生物の生活が続く、動的でありながらも安定して」おり「生息する生物は海岸の基質環境の多様化をもたらし、生物の多様性を増加と生産量の拡大を図っている」空間であると説明され、人為的改変による復元は不可能であるといわれる<sup>59</sup>。そこで、一旦破壊された生態系の復元・再構成を、人間の存在もその対象の中に含めて考慮し、建設工法に反映させたものが近自然工法である<sup>60</sup>。このような近自然工法に「見せる」ということを付加したカリフォルニアの海岸線のエコトーンのデザインは、渡 [14] によると人の「芸術的情動」に訴えかける空間となっている<sup>61</sup>。つまり、対象となる場所を「自然」を意識した形に可視的にデザインする（＝見せる）ことで、そこに生活する人やその場所を訪れる人が生態系の変わり目であるエコトーンを意識し、重要性を認識して、生態系保護へと各人が発想を転換させる、というプロセスがエコロジカル・デザインの中には隠されているのである。

### 3-4 エコロジカル・デザインの砂浜美術館活動への適用の可能性

では、砂浜美術館活動とエコロジカル・デザインの結節点は一体どこにあるのだろうか。

それは、次の図4-5のように、個人の意識転換の流れを整理した場合に明らかになると考えられる。

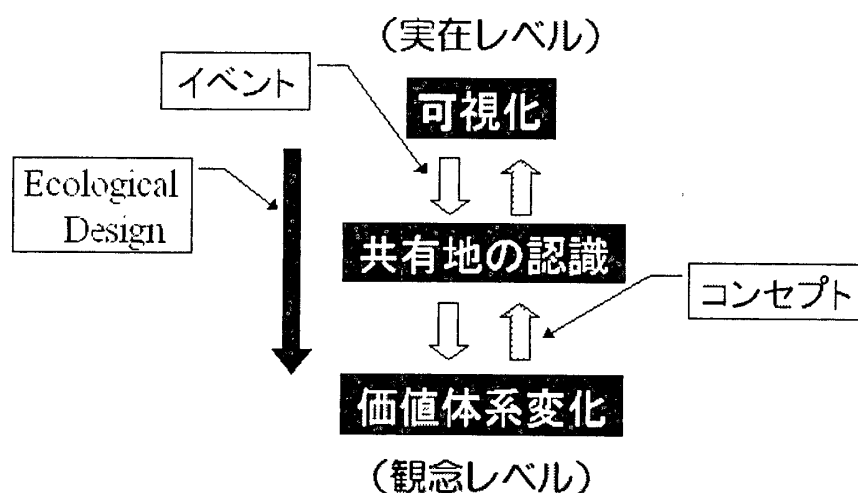


図4-5 砂浜美術館活動のコンセプトとイベントの意識への働きかけのプロセス

<sup>58</sup> シム他 [9] p.259.

<sup>59</sup> 景相生態学については [12] pp.65-71を参照.

<sup>60</sup> 水辺における近自然工法の実践については、クリスチャン・ゲルディ、福留脩文 [3] を参照した。この背景にある考え方はエコロジカル・デザインに包摂されると考えられる。

<sup>61</sup> 渡和由「海のビジュアルエコロジー カリフォルニアの海岸線と海岸法の美学」 [14] p.13.

砂浜美術館のコンセプトは、「ものの見方を変えるといろいろな発想がわいてくる。4キロメートルの砂浜を頭の中で『美術館』にすることで、新しい想像力がわいてくる」というように、発想を転換させてものを意識すると必然的に見えてくる、という人間の内的な意識の流れを推し進める。つまり、図4-5の下からの矢印のように、外部から持ち込まれたコンセプトは、大方町民（域内住民）の価値体系を変化させ、それによって入野の浜一帯を中心とした共有地を認識させる。そして、そこから鯨や花火、松原などを作品と捉えることができるようにさせる（可視化させる）。このように観念レベルから実在レベルへと向かう彼らの内的な意識の流れを促す潤滑油の役割を果たしてきたといえる。

一方、砂浜美術館のイベントは、町民にとって日常空間である砂浜を非日常的な異空間に仕立てあげること、共有地（砂浜）を再認識させ、価値体系を変化させる。例えば、Tシャツアート展であれば、砂浜に約1000枚のTシャツを並べ、空間自体を作品とすることでその空間の素晴らしさを視覚的に訴え、大方町民の誇れる場所と認識させる。そして、それによって域内住民の価値体系を変化させるという実在レベルから観念レベルへの流れを作り出している（図4-5の上から下への矢印の流れ）。

つまり、砂浜美術館活動は、そのコンセプトとイベントによって、観念・実在の双方向からのアプローチを行うことで、受け手（特に、域内住民）の内的な意識転換に働きかけるシステムになっている。

ところが、これまでも明らかになっているように域内へのコンセプト浸透度は低く、現在の活動には「わかりやすさ」が足りないということが指摘されている。『町史』や松本氏の論文で「イベントは考え方を伝える手段」であると明示しているように、砂浜美術館の考え方は主にイベントを用いて域内外の人々の視覚に訴えることで浸透が図られた<sup>62</sup>。だが、現在のイベントではその役割を十分に果たしきれていないといえる。

なぜ現在のイベントでは限界があるのだろうか。それを考えるにあたって、エコロジカル・デザインの考え方との比較を試みる。

エコロジカル・デザインは、Visual Ecologyとして、形ある目に見えるものという形で適用対象を具現化し、受け手の内的な意識転換の流れに働きかける点で、実在から観念への流れを生み出している。これは、砂浜美術館活動のイベントの担っている働きと同様であるといえ、この「実在→観念」の流れが両者をつなぐ結節点となりうる（図4-5のEcological Designの矢印を参照）。しかし、この2つを決定的に違えているのは、現在の砂浜美術館活動のイベントが主として、非日常空間を作り出すことで、域内住民にとっての潜在的な共有地を再認識させる手法を取っていることに対して、例えば、エコロジカル・デザインの具現化といえるVisual Ecologyでは、日常空間においても再認識への働きかけが可能となるという点にある。いわば、非日常のデザインと日常生活のデザインの相違である。

日常生活のデザインと非日常のデザインとの相違は、時間軸と域内住民の各デザインへの関心の度合いの関係から見るとより明確になると考えられる。

まず、日常空間をデザインするVisual Ecologyのほうであるが、こちらはそのアプローチにエコロジカルな発想を取り入れることで、恒常的に新奇性を確保することができる効果が期待される。つまり、デザインが施される対象となる生態系は域内住民の生活に密着しているため、デザインされた時点で共有空間という土台が域内住民に明確に意識される。そして、その生態系の維持・回復過程は土台となる共有空間の変容（景観の変化）という形で、域内住民の五感（特に視角）を否応

<sup>62</sup> 大方町史改訂編纂委員会 [2] p.475, 松本 [18] pp.112-113.

なく刺激する。その結果、域内住民もその空間に常に関心を引きつけられることとなる。

他方、イベントを実現形態とする砂浜美術館活動は、コンセプトにもとづいたイベントを行うことで域内住民の潜在的な共有空間（土台）を発見させることができる。この点では上と同様である。しかし、土台の変容が五感を刺激するのは期間限定で作り出された非日常空間においてのみであり、イベントが終わった時点でその刺激は途絶えてしまう。これを長期スパンで捉えたと、年月、回数を重ねても共有空間という土台そのものは変化をしないといえる。つまり、全体的に見ると、初期でこそ潜在的に存在した土台を発見させる（可視化させる）ということで域内住民に強烈なインパクトを与えることになるが、回を重ねるごとに新奇性への関心は必然的に逡減する。この逡減の度合いは、イベントに毎年多少の工夫をこらすことである程度緩和することはできる。しかし、問題は、初期段階においてイベントが域内住民に対してインパクトとならなかった場合である。砂浜美術館の考え方は、限られた時間と場所における例年のイベントによって伝達されようとしているが、それが終われば、あとは各自の内部における意識変革に任せられる。つまり、イベントに共鳴できた場合にはあらゆるものが「作品」として「見えてくる」が、共鳴できなかった場合には共有空間の発見すら期待できない。域内の浸透度の低さはこれに起因するものと考えられる。

これらからいえる両者の明らかな相違点は、砂浜美術館活動のイベントは主として期間限定で、展開される場所も限られている非日常をデザインしたものであるということに対して、エコロジカル・デザイン（Visual Ecology）は汎用性があり、広く日常生活におけるデザインまでがその領域に含まれるということである。

また、両者の違いは単に回数・場所の相違だけにとどまらない。例えば、域内住民の日常生活の中に目に見える形で砂浜美術館のコンセプトに即したデザインを組み込んだとしても、彼らがそれに共鳴しなければ現状のイベントによる働きかけと何ら変わりはない。域内住民の嗜好や享受能力に合致するか否かという活動の質に関する問題もそこには存在している。

文化経済学においては、「芸術（アート）」は文化の素地となるべきものとして注目され、「自然とは区別される人間の創造的営為」と定義づけられている<sup>63</sup>。これには、高尚な大芸術という意味の狭義のアートのみならず、人間の生活の中から生まれたものも含まれる。そして、本来的なアートにおいては、芸術と労働、生活は一体のものであると考えることから、主として後者のアート（これは、「ライフアート」といってよいだろう）が重要視される。また、文化の享受の機会には、先にも触れたように「①クリエイター、②享受者、③資金提供者、④文化マネージャー」の4つの存在が必要であると、中でも享受者には情報や芸術を理解する「享受能力」<sup>64</sup>が不可欠であるとしている。一方、文化のクリエイターやマネジメントの側にも「享受者が選択するための情報や学習、選択に応えうる供給システムの構築が必要となる」<sup>65</sup>といったように、創出する文化の質や多様性に配慮し、文化の享受機会を作り出す努力が必要であるという。

そこで、砂浜美術館活動を支えるイベントが対象としてきたアートに目を向けると、Tシャツアート展ほか、これまでのイベントによる活動は、第2章で「都会的なセンスと実際の生活との間に、大きなギャップがあった」と指摘されているように、住民生活に直接的に結びつくものである

<sup>63</sup> 後藤 [8] p. 1 - 2. 尚、文化経済学の基本的な考え方については、池上 [1] と後藤 [8] を参照した。

<sup>64</sup> 文化経済学では、しばしばその始祖とされる J. Ruskin のいう「固有価値」・「享受能力」といった理論を用いて文化の享受を論じる。具体的には、人間が「心のゆたかさ」を得て、生命力を發揮し、進歩するためには、財自身の「固有価値 (intrinsic value)」と「享受能力 (acceptant capacity)」が相伴う必要があるというものである。詳しくは、池上 [1]、後藤 [8] を参照。

<sup>65</sup> 後藤 [8] p. 21.

とはいえない<sup>66</sup>。例えば、Tシャツアート展ではその面白さはTシャツにプリントする写真やイラストといった「美術」作品に収斂される。したがって、鑑賞には多少なりとも美術への興味や関心が必要となり、その度合いによって面白さを享受できる人とできない人との格差が生じる恐れがある。活動の中では、文化の享受者である域内住民が「心のゆたかさ」を得たと感じられることが重要であるとの思いは常に意識されているようであるが、現状のイベントからは、日常生活との接点が見出しにくく、狭義のアートが対象となっている側面が濃いと見える。つまり、活動によって創出された文化の扱うアートの質が日常生活と乖離しているために、文化の享受者となるべき域内住民は創出された文化を自分たちのものとして認識できないでいると考えられる。

そこで、よりライフアートに近い形での働きかけを考えると、域内住民の選好や享受能力に即したものを供給することが、文化マネージャーにあたる（文化のクリエイターであるともいえる）砂浜美術館に求められる。今回比較に用いたエコロジカル・デザインは「場所、地域の物質、技術が持つ伝統的知識に敬意を払い、育てる」ものであるといわれるように、文化的文脈への働きかけをも射程に入れたデザイン（考え方）である<sup>67</sup>。この点で、エコロジカル・デザインは域内住民の日常生活に密着したレベルから実践することができる。

よって、これまでの検討からは、砂浜美術館の「常設展」である大方町そのもの（日常生活空間）へのアプローチが弱いのではないかと、ということが指摘できる<sup>68</sup>。具体的には次のようなことがいえる。すなわち、それは①「実在→観念」というプロセスでの働きかけ方としては、イベントだけでなく日常生活空間においても可能であるということ、そして、②今ある「常設展」を「見せ方」を工夫することで利用できるということ、③県の土佐西南大規模公園や町の都市計画などにアクセスし、まち全体をデザインのパーツと考えてみると、エコロジカル・デザイン（Visual Ecology）の手法を適用することで、生活に密着した活動に変容する余地があるということ、の3つである。

### 3-5 エコロジカル・デザインの適用に向けて—その動きと可能性—

そこで、デザインの視座に立って大方町の「まちづくり」を概観してみると、それらしい動きは既に起こっていることがわかる。それは、県管轄の土佐西南大規模公園（以下、西南公園）との連携である。第2章でも指摘されたように、西南公園は砂浜美術館活動のハード面を担える要素を持っている。例えば、域内住民も参加したというワークショップを経て決まった公園指定管内の湿地帯の保護や、海亀の産卵に配慮した園路の傾斜などが挙げられ、生態系に配慮したデザインは既にいくつか実現しているといえる。また、一時は物産センター建設予定地となっていた公園管内のラッキョウ畑が残される方向で計画されていることも、域内住民の日常生活とエコロジカルな考え方との結節点となりうる要素を孕んでいる<sup>69</sup>。しかし、これらの動きに砂浜美術館活動が直接的に

<sup>66</sup>『ノート』には、「環境という視点から考えると、Tシャツアート展は入野の浜の歴史や自然に直接的な関心と呼び起こすものではありません。できればそこまで踏み込みたいのですが。」とあり（[10] p.42）、イベントと日常生活との乖離という問題については、スタッフの間でも早くから意識されている節が窺える。

<sup>67</sup>シム他 [9] p.50.

<sup>68</sup>松本 [17] は、イベントを終えた日常の砂浜を常設展と呼んでいる。（「シーサイドギャラリー'90“夏”が終わり、いま砂浜美術館には、砂と波と風が描いた常設作品だけが静かに展示されています。」、p.94.）また、松本は、[18]で「砂浜美術館の意識が広がれば、入野松原周辺だけが『美術館』ではありません」といっている（p.115）。これから、本稿ではまちづくり全般を指して「常設展」という語を用いた。

<sup>69</sup>2002年8月には管内のラッキョウ耕作者によって、「豊かな自然環境・生活と共にある魅力的な風景を保存し、修景施設や環境学習施設として活用するため、ラッキョウ畑の良好な維持管理を行うとともに、地場産品としてのラッキョウの振興等を目的とし」た「土佐西南大規模公園『ラッキョウ農園会』」が立ち上げられた。（[11]）

関与しているかという点、ワークショップには砂浜美術館からも参加があったようであるが、未だ十分ではないようである。また、これらの事業は県が進めている西南公園の管轄であり、大方町の独自の事業ではない。域内住民の日常にアプローチするためには、できれば大方町自身の動きにアクセスしたい。先に触れたように、マスタープランでは都市計画の「推進の方向」として4つを挙げているが、その「(2) 自然との共生、都市景観形成の方向(質)；山、川、海が息づくまちづくり」においては「環境保全型農業の導入」、「四万十川方式による浄化装置の導入」、「宅地緑化の促進」ほか、エコロジカル・デザインの適用の可能性を示唆する表現が多々見られる<sup>70</sup>。これらから、砂浜美術館活動が今後、エコロジカル・デザインの視座に立った「まちづくり」を謳うなどして域内住民の日常生活に関わっていく余地は十分にあるといえる。

#### 4 む す び

最後に、エコロジカル・デザインのアプローチを組み込んだ場合に、活動が如何なる流れをもって3者関係の循環を成しうるかを図4-6で示し、本稿で提示したシナリオの要点を整理したい。

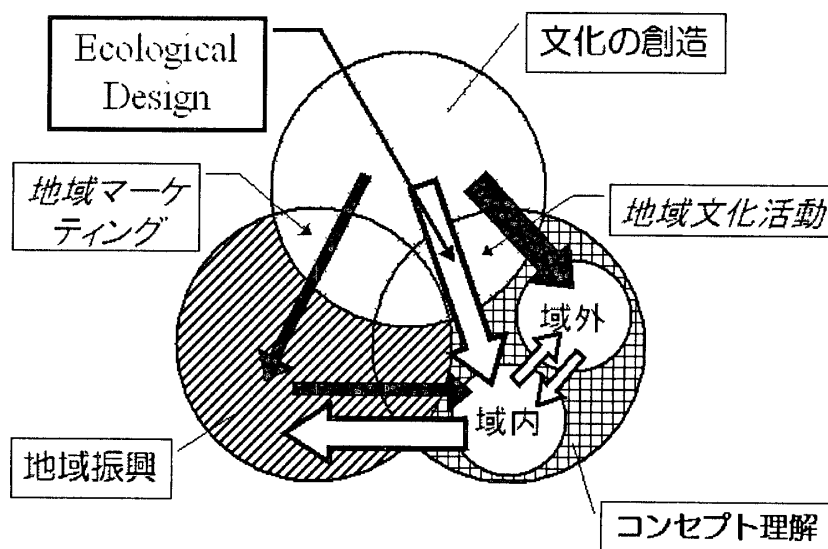


図4-6 エコロジカル・デザインによるまちづくりを組み込んだ3者循環関係

まず、現状では停滞気味である文化の創造から域内のコンセプト理解への流れ（右斜下向きの大矢印で示す）へ「エコロジカル・デザイン」の視座からアプローチする。すると、コンセプトは可視化され、「わかりやすい」ものとなり、域内住民にコンセプトが浸透する。この創出された文化は元来備えている普遍的な要素も十分に活かしながら、外部にも通用するものとなる。

そして、次に域内の人々の手でそれが自らの地域文化として発信されることによって（域内から域外への白抜き小矢印）、域外の人にもコンセプトがより浸透することが考えられる。つまり、外部に「見せる」ことを発端として、域内住民のアイデンティティや自己実現の意識が向上する。

域内住民のアイデンティティ向上の意識の高まりは、わが町の自信という形でこれまで以上に体的にも表明するという形で現れてくるようになるであろう。それが域外の人々にも認められた（面白いと認知された）とき、両者の間で様々な交流関係の流れ（域外から域内への白抜き小矢印）

<sup>70</sup> 高知県大方町 [5] pp.17-19.

が必然的に生じると考えられる。

この域内・域外の交流関係の流れが成立したとき、現在ウェートが置かれている地域振興経由の流れも相乗効果的に強化されうる。つまり、その先には、創出された新たな文化の魅力を具現化した新たな産業が生まれ、地域が経済的にも発展するという流れ（コンセプト理解から地域振興への白抜き大矢印）が想定できる。ここで、現況からは見出すことができなかった地域振興とコンセプト理解との間の相互の流れが生じるのである。

この3者循環関係は容易には達成しがたく、現段階では具体性に欠ける側面が存することは否めない。だが、本稿をもって強調したいのは、砂浜美術館活動と「まちづくり」の結節点となるエコロジカル・デザインによるアプローチの実践が、活動内の意識のベクトルの向きや太さを変え、3つの方向性の中での循環を生じさせうる、ということである。

そして、このことは、砂浜美術館活動や大方町の今後を考えるための一つの提案であるとともに、地域に新たに創出された“文化（地域文化）”のあり方に対する一考察であることにほかならない。

(濱口 恵子)

### 参考文献

- [1] 池上惇 (1991) 『文化経済学のすすめ』 丸善
- [2] 大方町史改訂編纂委員会 (1994) 『大方町史』 大方町
- [3] クリスマン・ゲルディ、福留脩文 (1990) 『近自然河川工法－生命系の土木建設技術を求めて－』 近自然河川工法研究会
- [4] 高知県大方町 (1999) 『大方町総合振興計画』 大方町役場企画管理課
- [5] 高知県大方町 (2002) 『大方町都市計画マスタープラン－都市計画に関する基本的な方針－』
- [6] 高知新聞：1992年6月26日、社説
- [7] 高知新聞：2002年4月5日
- [8] 後藤和子編 (2001) 『文化政策学：法・経済・マネジメント』 有斐閣
- [9] シム・ヴァンダーリン、スチュアート・コーワン (1997) 『エコロジカル・デザイン』 林昭男・渡和由訳、ピオシテイ
- [10] 砂浜美術館 (1997) 『砂浜美術館 BOOKS 1 砂浜美術館ノート 砂浜美術館の記録 1989－1996』 砂浜美術館
- [11] 土佐西南大規模公園ラッキョウ農園会 (2002) 「土佐西南大規模公園『ラッキョウ農園会』設立総会資料」
- [12] 沼田眞編 (1996) 『景相生態学－ランドスケープエコロジー入門－』 朝倉書店
- [13] 濱口恵子 (2002) 「砂浜美術館活動の担い手と意識の展開」 高知大学大学院人文社会科学研究科『平成13年度 総合高知研究論文集』 pp. 9－24
- [14] ピオシテイ (2000) 『BIO-City』 no. 19
- [15] ピオシテイ (2000) 『BIO-City』 no. 23
- [16] ビル・モリソン、レニー・ミア・スレイ (1993) 『パーマカルチャー－農的暮らしの永久デザイナー－』 田口恒夫・小祝慶子訳、農山漁村文化協会
- [17] 松本敏郎 (2002) 「ひらひらの文化－Tシャツアート展－」 高知大学大学院人文社会科学研究科『平成13年度 総合高知研究論文集』 pp. 88－110
- [18] 松本敏郎 (2002) 「21Century 砂浜美術館構想」 高知大学大学院人文社会科学研究科『平成13年度 総合高知研究論文集』 pp. 111－117
- [19] 山崎正和編 (1993) 『文化が地域をつくる』 学陽書房

## 第5章 砂浜美術館活動の課題と展望

### 1 砂浜美術館活動が直面する課題

砂浜美術館立ち上げ時には、2つの目標があった。ひとつは、地域住民の「ものの見方」の転換であり、今ひとつはそうした「ものの見方」を外向けに発信することであった。『砂浜美術館ノート』（以下、『ノート』）でも松本氏は「いつも都会を追いかけ、あこがれてきた」が、都会には「追いつくことはできなかった」、そこで、「『わたしたちにとって本当に大切なものは一体なんだろう……』とまわりを見つめ、考えるようになった」と述べている。「ものの見方」を転換し、身近な環境を再評価する姿勢がそこには明確に示されている<sup>71</sup>。後者については、梅原氏の企画書の一文、すなわち、「私たちは、考え、行動し、日本全国に『大切なことを伝えてゆく作品』を、この『砂浜という美術館』から、発信してゆこうと思います」、に端的に表れている。

10年以上が経過した現在、この2つの目標はどこまで実現されたのであろうか。まず、対外的な発信についてみると、これは良好な成果を得ているといえる。砂美人連の松本敏郎氏が強調するようにTシャツアート展は「公募・会期・結果発表とひとつの行事の中で3回も情報発信ができる」わけで、「砂浜美術館は大方町の個性を内外に強烈に印象つける組織的活動」を実践している。この点は誰もが認めるところであろう<sup>72</sup>。また、受賞歴にも目覚ましいものがある。91年、毎日新聞社郷土提言賞（準毎日郷土提言賞）・竜馬賞、92年日本イベント大賞（優秀賞）・高知県ふるさと創生大賞、96年朝日海への貢献賞（ふれあい学習準賞）、2000年ふるさとづくり賞（内閣官房長官表彰）など多彩である。田中の分析（第3章）をみても、町民の80%が砂浜美術館は町のイメージアップになったと回答しており、対外的な発信能力は住民にも高く評価されていることがわかる。

しかし、地域住民による「ものの見方」の転換となると成果はいささか心許ない。田中が第3章で町民ヒアリングおよびアンケート結果から得た結論は、砂浜美術館の「コンセプトの意味まで理解されているか」という疑問が残る<sup>73</sup>であった。また、奥村も出展者の動向分析からTシャツアート展への地元参加率の低下傾向を指摘し、「住民の意図とは違う方向にベクトルが動き出してきた」とする<sup>74</sup>。

地域との結びつきの弱さは砂浜美術館事務局の水野聖子氏からのヒアリングでも確認された。松本氏も「『砂浜美術館』が『町のもの』になっていなくて『砂美人連のもの』として捉えられ、住民が『自分のもの』として意識できていない」と述べている<sup>75</sup>。「ものの見方」を転換しようとする意識は、砂浜美術館事務局や砂美人連の中では共有されている。しかし、住民レベルでの浸透は大きく立ち後れたままなのである。

これに関連して、安岡は第2章で「住民にとって、この都会的なセンスと実際の生活との間に、大きなギャップがあった」と指摘している。確かに、このギャップは砂浜美術館のコンセプトが「選択的土着民」<sup>75</sup>によって域外から持ち込まれたことに起因しているのかもしれない。

地域を動かすコンセプトは、しばしば「外来者」や「一時的漂泊者」と地域住民の「合力」によって生み出される。しかし、大方町においてはコンセプトが地域住民にとって身近な存在になり切っ

<sup>71</sup> 砂浜美術館 [8] p.16.

<sup>72</sup> 松本 [14] [15] を参照.

<sup>73</sup> 奥村 [3] p.58.

<sup>74</sup> 松本 [15] を参照.

<sup>75</sup> 「選択的土着民」とは菊池 [4] p.26, [5] p.90で紹介されている言葉である。菊池によれば「1989年頃に30歳前後で砂浜美術館の活動を始めた中心的メンバー」をさす。彼らは「大方町で住むことを『選択』した『定住民』であり、自らを『選択的土着民』と名乗っている」という。

ていない。これは『ノート』で紹介されているコンセプトが「近代に入ってから哲学者や芸術家たちが何十年もかかってつくり上げてきた概念と同じ」とする難解さがもとよりあったからである。言い換えれば、コンセプトが住民の日常生活にまで到達するほどの熟度を持っていなかったからに他ならない。

問題をさらに深刻にしているのは、対外的な宣伝効果の逓減と財政難である。

対外的な宣伝効果は、すでに見たように砂浜美術館の重要な存在理由となってきた。確かに1回の企画で数次に渡る宣伝効果が得られる仕掛けは他に見られない。にもかかわらず、イベントが恒例化し、見慣れた風景になりつつある点は否めない。活動内容に目立った変化がない限り、そのニュース性は徐々にではあるが減衰する。宣伝効果の目減りは砂浜美術館の存在を脅かす材料となる。

その一方で、砂浜美術館を財政的に支えてきた役場の財政の逼迫がある。バブル期以降、全国各地の地方自治体では公共投資の増大による地域活性化が図られた。その結果、2000年代初頭に償還額が急増し、財政破綻を招く危険性が指摘されている。大方町もその例外ではない。町の年度別借入額は85年以来増加の一途を辿り、98年にそのピークを迎えた。85年に4億6千万円余りであった借入額は98年になると実に9億円を超える<sup>76</sup>。これを反映して、償還額も年々増加する傾向にあり、ピーク時の2004年には年額8億7千万円もの償還が予定されている。

償還額の増加による財政危機を乗り越えるためには歳出の削減が欠かせない。高知県財政運営管理計画（大方町）では2001年度から2005年度までの間に職員定員を9名削減し、これを乗り越えるプランを提示している。

また、長期的な財政負担の増大も見落とせない。人口の減少と高齢化の進展は徐々に財政を圧迫する。町の試算によると、現状の介護費用を前提に将来の介護保険料を算出すると、住民一人当たりの負担額は2,750円（2000年）から3,256円（2010年）に増加するという。また、住民税も同様に20,927円から24,360円に引き上げられるという。

こうした宣伝力と町の財政力の低下は、砂浜美術館活動への財政支援を直撃しかねない。すでに町財政は予算のマイナスシーリング制を導入し、財政の引き締めを図っている。幸い2001年度までは、砂浜美術館への予算を大幅に削減する決定がなされた経緯はない。しかし、文化行政という結果の見えにくい政策は財政削減のターゲットになり易い傾向がある。住民からの理解が必ずしも得られていない現状をみればなおさらである。

環境の変化に危機感を強めた砂浜美術館スタッフは2001年からTシャツアート展入賞作品をミュージアムグッズとして直販する仕組みを立ち上げている。電話やインターネットで受注すると、2週間ほどでBJプリンタで印刷したTシャツを工場から直送するシステムである。Gallery [T]と名づけられた商品一覧（パンフレット）には35アイテムが展示され、1枚が3,900円で販売されている。作品はインターネット市場「楽天」にもアップされており、販売形式そのものも従来とは異なる形態を模索している。また、2002年度のTシャツアート展では（株）ワコールの協賛を得るなど新たな財源の獲得を試みている。

「伝えたいのは考え方です」<sup>77</sup>と言い切り、収益を目指した活動とは一線を画してきた従来の砂浜美術館の立場からみると、Tシャツの直販企画がいかに画期的な試みかがわかる<sup>78</sup>。これは、鬼頭が

<sup>76</sup> ちなみに、99年度の大方町の歳出総額は約60億円である。

<sup>77</sup> 砂浜美術館 [8] p.40の見出し。

<sup>78</sup> ただし、砂美人連のメンバーの一部に早くから砂浜美術館の収益活動を強調する意見があった。この点については濱口 [10] および菊池 [4] p.26を参照。



いう人と自然の関係を「切り身」から「生身」に再生する動きとも解釈できる<sup>79</sup>し、「内発的発展」への転換点としての理解もできる<sup>80</sup>。

一方、砂浜美術館側からみると、一連の動きは住民の理解を得るための努力といえる。住民の理解には、起業を通じて砂浜美術館が住民にとってわかり易い存在にならなければならないとの認識がその根底にある<sup>81</sup>。しかし、この試みも今のところ住民に利益を還元できるほどの事業になり得ていない。

## 2 地域との関係再生の方途

高知県内にはデザインやアートの方で地域の自然の魅力を引き出し、起業に成功した事例がいくつか見られる。馬路村農協による村おこしや（株）明神水産による鰹のタタキの直販が典型例である<sup>82</sup>。筆者の調査結果<sup>83</sup>によると、いずれの場合にも域内（ないしは企業内）の生産を統括できる生産側の担い手と都市部のニーズを把握したデザイナーやコピーライターが情報を共有しながら製品や販売ルートを開拓してきた経緯がある。

これに関連して、コトラーの以下の指摘は重要である。すなわち、コトラーは今日の経済に影響を与えるトレンドとして次の事項を挙げている<sup>84</sup>。

- (1) 「アーカリング」；現代のライフスタイルのよりどころとするために、昔の生活習慣を取り入れる傾向。
- (2) 「ビーイング・アライブ（元気に生きる）」；より長く、より楽しく人生を送りたいという願望。
- (3) 「都会からの脱出」；よりシンプルで慌ただしくないライフスタイルへの願望。

このようなトレンドに対応して、商品開発や宣伝において地域（田舎）の自然とその自然の中で育まれている生活そのものを素材に選ぶ傾向が生まれる。馬路村農協の『ごっくん馬路村』を代表するユズ製品はまさにこうしたマーケティングの実践例といえる。

マーケティングは、「利益が出るようにニーズを満たす」<sup>85</sup>ことを課題としている。人と社会のニーズは、マーケティング活動によって掘り起こされ、特定の製品・サービスに対する需要がつくり出される。マーケティングの対象は、製造物、サービス、組織、イベント、経験、場所、アイデアなど、利益を生み出すことにつながるものであれば何でも対象になる。大きな企業が大量に生産する財やサービスに限定されない。規模が小さく、これまで全く見向きもされていなかったもの、ニーズがあると考えられなかったものさえも、マーケティングの仕方によっては、ニーズを掘り起こし利益を生み出す可能性がある。これまで地域（田舎）の産品は、大量生産、大量流通の対象になりにくかった。しかし、新しい販売チャンネルが開発されるなかで、少量の産品でも販路を見出すことができるようになってきている。地域で開かれるイベント、市、道の駅、デパートでの物産展から始まり、なにより宅配便による個別注文、インターネットを通じた販売などがそれである。

しかも「田舎ぐらしに対する憧憬」、「より長く、より楽しく人生を送りたいという願望」、「都会

<sup>79</sup> 鬼頭 [6]。

<sup>80</sup> 内発的発展については例えば鶴見 [9] を参照。

<sup>81</sup> この意識変化については、濱口 [10] を参照。

<sup>82</sup> 馬路村が農業、（株）明神水産が水産業であるとすれば、大川村の木星会は同様手法で起業した林業分野の事例といえる。

<sup>83</sup> 詳細は飯國 [1] を参照。

<sup>84</sup> コトラー [12] p. 172.

<sup>85</sup> コトラー [12] p. 3.

からの脱出志向」, 「田舎への回帰志向」のトレンドが生まれるなかで, 多種多様で少量生産の地域(田舎)の産品やサービスに対しても, 一定の需要が生まれようとしている。それらのマーケティングにおいては, スマートさよりも, 田舎暮らしの素朴さ, 健康, 安全といったその地域のイメージを作り出すことが重要である。地場の産品, サービスをマーケティングするには, 地域(田舎)そのもののイメージを形成し, 地域(田舎)のイメージを潤滑材とすることが効果的である。このことの重要性を『ごっくん馬路村』のマーケティング戦略は教えている。

砂浜美術館が始めたTシャツ直販事業は「ビーイング・アライブ」や「都会からの脱出」の条件を満たす。また, デザインやアートを起点にした点でも, 馬路村の事例と共通の特徴を持つ。しかしながら, 「アーカリング」の条件を満たしているとは言い難い。Tシャツ生産の拠点は域外(東京)にあり, デザイン自体にも地域性を望むべくもない。このため, Tシャツには地域固有の性格が薄く, 販売戦略も立てにくい状況にある。現状のままでは事業の展開は容易ではない。

また, 大方町で起業を考える際に中村市との関係を忘れてはならない。現在, 大方町住民の多くが職場を中村市に求めており, 大方町はベッドタウン化する傾向にある。したがって, 大方町での生産に拘らなくとも, 職場が確保できるとする意識が根強く, 危機感が乏しい。言い換えれば, 起業すること自体がそもそも困難な環境にある。

鬼頭は人間と自然が取り結ぶ関係(リンク)を2つに大別している。ひとつは社会的・経済的リンクであり, 他方は, 文化的・宗教的リンクである。前者は生業を通じての自然とのつながりであり, 後者は生活を通じてのつながりを示す<sup>86</sup>。

言うまでもなく, Tシャツ直販事業は社会的・経済的リンクの修復を目指している。確かに, 起業を通じたリンクの回復は地域住民の理解を得るためには最も効率の良い方法かもしれない。しかし, 少なくとも, 砂浜美術館は「ものの見方」の転換を主題として活動を継続してきた。したがって, 活動の場はもともと生業というより生活の次元に近かったはずであり, 今後の砂浜美術館活動を見通すとき, 起業よりむしろ生活の方に重きを置いてつながりを捉え直す発想も合わせ持つべきだろう。生活からのリンクはコトラーが指摘する「アーカイング」にも通ずる点を強調しておきたい。

そもそも砂浜美術館活動がもつ効果のうち最も重要なのは, それが「地域の価値を高めているか」ということである。ここでいう「地域の価値を高める」とは, 何らかの事業が地域住民の生活意識に変革をもたらし, それによって地域の個性が認識され, この地域イメージをブランドとして地域の産品やサービスの販路拡大が達成されるという意味で使っている。砂浜美術館活動は, 地域住民によって自分たちの住む環境に対する見直しが進むことを期待して取り組まれてきた。

活動の進展について最も理想的なシナリオを思い描けば, まずは, 美術館活動が地域住民の環境意識を覚醒させ, 地域全体を「エコ・タウン」とするような変革を生み出さなければならない。また, 大方地域がエコツーリズム, グリーンツーリズムのメッカとなることで, 地域がブランド化され, 大方ブランドのもとに地域の産品やサービスの域外販売が促進されるという筋書きが想定できる。こうした展開に沿って事が進めば, 活動は, 地域に高い価値を付け加えることになるだろう。

住民の生活からすれば, 入野松原は, もともと台風の高波を防ぐ防災効果があり, 夏には昼寝を楽しむところであった。また, 砂浜は, 蛤を採取するところであり, 月見を楽しむ場所であり, 健康のために散歩するところでもあった。同時に, 第2章で安岡が明らかにしているように, 海水浴や釣りを楽しみ, 浜辺での魚料理を楽しむ場も提供してきた。砂浜美術館活動が地域の価値を高めることに成功していないのは, こうした砂浜と住民の生活との歴史的な関わり合いを積極的に組み

<sup>86</sup> 鬼頭 [6]。

込んだものとして活動が展開されるのではなく、地域住民にとってわかりにくいコンセプトをもって活動が構成されていることにそもそも問題があったのかもしれない。

生活領域を重視すべきとする立場は本論文の執筆者である安岡や濱口にも共通した認識となっている。すなわち、安岡は「住民の理解を得るためには（中略）...『地域文化に対する認識の転換』を重視し、新たな文化を創造する活動」の必要性を強調する。また、濱口は「活動の可視化」が重要であり、「生活と砂浜美術館活動が一致できる点を模索」すべきだとする。濱口はさらに、これを具体化する手段として「エコロジカル・デザイン」を切り口にしたまちづくりを提案している。

こうした生活重視の視点は砂浜美術館スタッフの意識の中にも見出せる。例えば、松本氏は「21Century 砂浜美術館構想」において今後の砂浜美術館の展開方向を検討する中で、「(砂浜)美術館通り」と名づけた道路の設置や「よく手入れの行き届いた谷沿いの小さな田の群落」に着目した「一谷美術館」構想、さらには土佐西南大規模公園事業に砂浜美術館のコンセプトを取り込むことを提案している。いずれも生活側からの発想といえる<sup>87</sup>。

ただし、生活を重視するからといって起業を無視するわけではない。個性のある地域づくりはむしろ多様な製品の販路開拓を可能にする。生活空間に砂浜美術館のコンセプトを埋め込んだとき、地域には新たな価値が付与され、その先には生業の創出すら展望できるのである。

### 3 む す び

冒頭に小澤が指摘した「ことばの力」は、砂浜美術館が1989年に産声をあげてから、すでに10年を超える活動を支え続けてきた。長期に渡る活動にもかかわらず、域外からの評価は未だ衰えていない。実際、2002年になって（株）ワコールからの財政的支援も始まり、それを受けて東京や大阪でTシャツアート展関連の展示会やイベントが開催されるようになった。しかし、その一方で住民への理解は進まず、活動を支えてきた大方町も財政難や合併問題から砂浜美術館への長期的な支援を確約できない状況に追い込まれつつある。

本稿で提示した砂浜美術館活動と生活とのリンクは、この状況を打破する突破口になる可能性を秘めている。ただし、問題はその方法である。生活とのリンクは砂浜美術館という非営利組織だけが容易に実行できる課題ではない。また、住民の理解が進まない以上、住民主導の活動も望めない。したがって、生活とのリンクを具体化するには町のイニシアチブが不可欠なのである。

これまで、大方町はその長期計画のテーマを「人と自然が共生する町」として砂浜美術館のコンセプトを明確に取り入れ、Tシャツアート展やキルト展などのイベントを財政的・人的に支援してきた。この支援をさらに拡大し町行政の全般で砂浜美術館のコンセプトを共有する必要がある。

その際、注目すべきは砂浜美術館活動がこれまで培ってきた人材である。砂浜にTシャツを展示すること自体が空前の企画であり、その実現の過程では常に誰も経験したことのないような難問に直面しなければならなかった。こうした場は砂美人連のメンバーの企画力や実行能力を育成してきた。また、アートに関わる活動の中でメンバーはもの作りの楽しみを体得し、砂浜美術館を超えた活動を展開しはじめている点も見逃せない。

筆者はこうした人材として、まず、松本敏郎氏と畦地和也氏の両氏を挙げたい。2人は、デザイナーである梅原真氏の発案したコンセプトを具体化し、発展させてきた<sup>88</sup>。その具体化はまさにゼロからの出発であった。例えば、Tシャツを展示するための杭打ちひとつをとっても、その長さや設置方法さらには埋め込みの深さなど白紙の状態から考えざるを得ない課題ばかりである。しか

<sup>87</sup> 松本 [15] を参照。

<sup>88</sup> 詳細は松本 [13] [14] [15] などに詳しい。

も、海とTシャツのコントラストを大切にするためにできるだけ杭は海側に打ち込みたいが、その一方で海に入りすぎると杭が潮にさらわれたり傾く危険性が高まる。このため、杭打ちでは両者のバランスに配慮した作業が余儀なくされる。両氏はこの種の難問を次々に解決し、Tシャツアート展を実行にうつしてきたのである。

砂浜美術館の企画や運営に関しては、砂浜美術館事務局の水野聖子氏も欠かせない存在である。氏は95年から事務局入りして以降、美術館の基本的な運営を一手に引き受けている。また、これと並行してエルダーホステルのプログラムの一環としてグリーンツーリズムを立ち上げ、大方町をフィールドにしたグリーンツーリズムのガイドブック『ぼっちぼっち』<sup>89)</sup>の作成に参画するなどの実績を残している。最近では近隣の学習施設(四万十楽舎)や自然保護団体(トンボと自然を考える会・黒潮実感センター設立委員会)他と連携しながら、四万十川流域圏でグリーンツーリズムを模索する場を設けるなど大方町に新たな動きをもたらす企画を発信し続けている<sup>90)</sup>。

一方、アートを体得したメンバーとしては、第1回砂浜美術館で砂像づくりの技術を修得した武政登氏ら数人を挙げたい。このメンバーは鹿児島県加世田市で開催される砂像の全国大会で3度の優勝を果たし、2000年、2001年には世界大会にも参加するほどの水準に達している。このほか、浜田拓氏も当初からメンバーであるが、氏は95年に入野海岸の砂浜をテーマにした写真集を出版し<sup>91)</sup>、「目の前の砂浜に立ち、あらためて見つめてみると、そのすばらしさに」気づいたが、「その一方で、人間によって変わりゆく砂浜にもがっかりもし」、その姿を伝えようと出版に踏み切ったと述べている。この写真集は刻々と変化する入野の浜と松原の魅力を余すことなく伝えるものとなっている。

いずれのメンバーも人と生態系との調和の必要性やそれをアートとして表現・具体化する能力に長けている。しかも、上に挙げた人々は水野氏を除いてすべてが役場職員であり、他の小規模自治体では容易に見出すことができない人的資源の蓄積が進んでいる。

一過性のイベントを繰り返しながらも、砂浜美術館は、固有の人的資源を着実に蓄積してきたのである。砂浜美術館の存亡が問われようとしている現在、これまで蓄積した能力を行政の領域でも最大限に活かす時期が到来しているといえるのではないだろうか。

(飯國 芳明・村瀬 儀祐)

## 参考文献

- [1] 飯國芳明 (1997) 「農村の活性化と地域産業の創出」『農林問題研究』 第33巻 第3号 pp.11-20
- [2] 大方町 (1999) 『大方町振興計画』
- [3] 奥村訓代 (2002) 「Tシャツ・アート展からみた大方町と国際化」高知大学大学院人文社会科学研究所『平成13年度 総合高知研究論文集』 pp.56-63
- [4] 菊池直樹 (1999) 「『地域づくり』の装置としてのエコ・ツーリズム－高知県大方町砂浜美術館の実践から－」『観光研究』 第10巻 第2号 pp.19-28
- [5] 菊池直樹 (2000) 「砂浜が『美術館』」鳥越皓之編『環境ボランティア・NPOの社会学シリーズ 環境社会学1』新曜社
- [6] 鬼頭秀一 (1996) 『自然保護を問い直す－環境倫理とネットワーク』ちくま新書

<sup>89)</sup> 自然環境研究センター [7].

<sup>90)</sup> 2002年3月に「はた・エコツーリズムセミナー」の名称で実施された。

<sup>91)</sup> 浜田 [11].

- [7] (財)自然環境研究センター (1998)『ほっちほっち 大方町エコツーリズムガイドブック』
- [8] 砂浜美術館 (1997)『砂浜美術館 BOOKS 1 砂浜美術館ノート 砂浜美術館の記録 1989-1996』 砂浜美術館
- [9] 鶴見和子 (1996)『内発的発展論の展開』 筑摩書房
- [10] 濱口恵子 (2002)「砂浜美術館活動の担い手と意識の展開」 高知大学大学院人文社会科学研究科『平成13年度 総合高知研究論文集』 pp. 9-24
- [11] 浜田 拓 (1995)『砂浜便り-浜田拓写真集』 砂浜美術館
- [12] フィリップ・コトラー (2001)『コトラーのマーケティング・マネジメント』 恩蔵尚人監修, 月谷真紀訳, ピアソン・エデュケーション
- [13] 松本敏郎 (2002)「砂浜美術館の世界」 高知大学大学院人文社会科学研究科『平成13年度 総合高知研究論文集』 pp. 80-87
- [14] 松本敏郎 (2002)「ひらひらの文化」 高知大学大学院人文社会科学研究科『平成13年度 総合高知研究論文集』 pp. 88-110
- [15] 松本敏郎 (2002)「21Century 砂浜美術館構想」 高知大学大学院人文社会科学研究科『平成13年度 総合高知研究論文集』 pp. 111-117

平成14(2002)年10月3日受理

平成14(2002)年12月25日発行